

---

# ロックマンX6（本編再構成）

うわばら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロックマンX6（本編再構成）

### 【Zコード】

Z5923Z

### 【作者名】

うわばら

### 【あらすじ】

この作品はロックマンX6の一二次創作となります。

- ・本編と異なるシナリオで物語が進みます
- ・8ボス含む多くのメインキャラが本編と性格が異なります
- ・モブでオリキャラが登場しますがメインのオリキャラの登場予定はありません
- ・漫画版ロックマンXの影響を大いに受けています
- ・その影響で「エックスは唯一泣けるレプリロイド」という設定が

あります

以上の点に嫌悪感を感じる方は、読むことを控えるのをお勧めします。

それでも受け入れていただけるなら、少しでも田を通していくだけ  
ましたら幸いです。

また、この作品はarcadiaにも掲載しています。

## #0 GENHOU(天才)

「ようやく会えたの。お主が噂の天才クンじゃな？」

「なんだ貴様らは。面会など受け付けた覚えはないぞ?」

「まあまあ、そう邪険にするでない。わしはケイン、ヒーローイレギュラー・ハンター本部のナビゲーターを勤めるエイリア君じゃ」

「そして私が、ケイン様のサポートを勤めますドッپラーです。以後お見知りおきを」

「以後だと? 他人の研究室に土足で上がりこんだ挙句、世迷いごとまで語りだすか。これだから低脳の思考は理解しがたいよ」

「まあの～～～。なにもすぐに覚えてくれる必要はないぞい。なにせ、今後は長い付き合いになるのじゃからな」

「さつきから何の話をしている? 早々そいつらを連れて出て行

「

「なあに、簡単なことじゃよ。わしとひと勝負してみる気はないかね?」

「勝負だと?」

「せうとも。キミの作り出すプログラムを、わしが解析できればキミの負けじや。わしが勝利した暁には……そつじやの～～～、わしと友人になつてもらおうか

「友人だと？ 下等な人間風情の二流科学者が、ボクと同格のつも  
りか！？ 痴呆の妄言になど付き合つていられん」

「そ～かそ～か、そいつは申し訳なかつたの～～～。天才と謳われ  
し科学者といえど、やはり負けるとわかりきつた勝負は気が引ける  
ようじやの～～～。こいつは少々大人気なかつたかの～～～」

「……いいだらう。その枯れ果てた脳で無様に足搔くがいい！」

「望むどこのじやい！ そいじや、早速始めるとするかの～～～」

「まだじやあ～～～……あと、あと少しでえ～～～……ぐう……」

「ケイン様を休ませてきます。隣の空き部屋をお借りしても

「好きにしろ。ここまできたら、もはや今更だ」

「お心遣い、感謝いたします」

「ハツ、ようやくくたばつたか。人間のくせにフ日も不眠不  
休で解析に明け暮れるとは。こいつがレプリロイドならすぐに解体  
してやるところだ」

「人間だからこそ、目を見張るんでしょ。彼がレプリロイドならこ  
のくらいは当然のことよ」

「違ひない。それで、いつたい何のつもりだい、エイリア。あんな害虫をボクの研究室に招きいれて……返答次第では、いくつもタダではおかねいよ?」

「私がケイン様にお願いしたわけでじゃないわ。あの人に頼まれたから、あなたの研究ラボまで案内役を買って出ただけよ」

「どうやらでも同じことだ! ボクの組み立てた崇高なプログラムを、あんな下賤な三流に汚されるとは

「あの人があの三流なんかじゃないこと、あなたもよくわかつたはずでしょ!」

「フン。確かに図々しさと面の皮の厚さには田を見張るな。あれが同じ研究者の端くれと考へたら虫唾が走るよ」

「……ふふつ」

「何がおかしいんだい?」

「嬉しいのよ。昔のあなたなら、良し悪しに閑わらば他人を評価なんてしなかつただらうから」

「……相変わらず、キミの話し相手は疲れるよ」

「やう? 私は楽しいけれど」

「ボクは不愉快なんだよ! まったく、しばらく見ないうちに図々しさが増したね」

「ケイン様！ もう少しお休みになられたほうが

」

「バカもん！ 十分睡眠もとったし、これからが本番じゃー！」

「何を言つてゐる、貴様の負けだろ？ これに懲りたら一度とその面をボクの前に晒すな！」

「なんのことかね？ はじめから時間制限など設けておらんし、わしがあきらめるまで負けは認められんの～～～」

「なつ……バカバカしい。これ以上付き合つていられるかーーー！」

「逃げるのかの～～～。ならわしの勝ちとこいじじやね

「あ、貴様

」

「そうね。せつかくだから、私も挑戦させてもらひつかしく～～」

「それならば、今度は私も協力させていただきます

「ダメじゃー！ これはわしと彼の勝負で

」

「勝手にやつていろ！ 本当にどこまでも人を苛立たせる連中めー！」

それはまだ、全てが狂い始める前の、幸せなひと時の夢。

「いつたい、何が起こつたんだ? コロニー落下は阻止できたと聞いたが……これでは、失敗したのと同じだ」

視界に広がるのは不気味な紫に染まった空、最果ての見えぬ広大な砂漠。

三週間前、地球に落下した巨大コロニー『コーラシア』。イレギュラーハンターの手により、地表への衝突こそ阻止されたものの、その余波とばら撒かれた ウィルスは瞬く間に地球を荒廃へ導いていった。

人類の英知の結晶たる高度な街並みは軒並み倒壊し、生命の象徴たる縁は余すことなく汚染された。

多くの命が犠牲になり、1000を超えるレプリコイドがイレギュラーと化した。

ウィルスの蔓延はあくまで一時的なものであり、現在はレプリコイドたちの手により地上の再建が進みつつある。しかし、その被害は未だ甚大であり、生き残った人類はシェルターでの非難生活を余儀なくされる状態である。

「滅亡」を免れただけよかつたというのか……それだけじゃない。何かが、起ころうとしている」

荒野に佇む一体のレプリロイド　　ゲイトは奇妙な胸騒ぎを感じていた。

だがしかし、それは不安や恐怖を煽るものではなかつた。もとより、彼にそのような感情は存在しない。

それは新たな始まりを予感させるものだつた。

今、世界は転機を迎えてゐる。なぜかそう確信できたのだ。

「探しましたよ。貴方がゲイト博士ですね」

そして、新たな災厄の開幕となる最悪の邂逅が果たされた。

ゲイトが振り返ると、そこにはいつの間にか、老人を模した科学者のようなレプリロイドが立つっていた。

「我が名はアイゾック。この朽ち行く世界の再生のため、天才科学者として名高い、貴方様の力を貸していただきたい」

その言葉に、ゲイトは思わず瞠目する。だが、見開かれた瞳も即座に細まり、その表情は冷笑へ変わる。

天才　　未だに自分をそう呼ぶ存在がいたことに驚かされはしたが、所詮それだけのことである。

もとより、ゲイトは世界再生に貢献する気など微塵もない。むしろ、数えるのも鬱屈なレプリロイドたち、人類に媚び説うしか能のない傀儡が激減したことにしていせいでいた。

彼が天才と称えられたのは遠い昔。

ゲイトの開発したレプリロイドは悉く高性能を誇り、高度なプログラムが搭載されていた。

誰もが彼を天才と呼んだ。

彼の功績を神の所業と褒め称えた。

その偉業が崇められたのもわずかの数年の間。ゲイトの生み出すプログラムは、あまりに高度過ぎたのだ。それは超一流の科学者すら、匙を投げ出すほど難解な代物だった。

ゲイト以外の誰にも解析できないプログラム。製作者の意図、目的、思惑の一切を伺わせぬパンドラの箱。危険視されはじめるのには、そう時間はかかるなかつた。

事故、処罰、イレギュラー化　　様々な名目の元、彼の才能の具現たるレプリロイドたちは、ついには一体も残ることなく処分された。

そしてゲイト自身も『異端児』の烙印を押され、科学界を追放される身となつた。イレギュラー認定されなかつたのは、上の情けのためだらうか。

「『天才』だと。ハツ、あまり笑わせてくれるなよ。お前にボクの天才の何が分かるというんだ？」

結局のところ、凡庸な科学者たちは、天才の何たるかを理解できなかつたのだ。彼らの思い描く天才の理想像など、ゲイト自身の足元にも及ばぬ偶像にすぎなかつたのだ。

それゆえ、奴らは恐れたのだ。底知れぬ自分の才能を。

人間という生物は得てして、理解の及ばぬ対象に恐怖を抱くとう。生まれてこの方、解析できぬ存在と遭遇したことのないゲイトは「恐怖」と無縁の存在だつた。彼にしてみれば、人間の抱くその感情こそが、理解に苦しむものだつた。

だがしかし、自分の周りに群がるレプリロイドは、その全てが凡庸な愚物にすぎなかつた。ならば人間を模して造られた俗物が、自分を恐れるのは必然といえるだらう。

「いや、貴様ら下等なレプリロイドだけじゃない。この世界にボクに並ぶものなど存在しない！ 何者も、このボクの才能を理解することなどかなわないんだ！」

彼を知らぬ者からすれば、その発言は失笑に値するだらう。その度を越えた傲慢さこそが、天才を異端児たらしめた要因のひとつであることに、ゲイト自身は気づいていない。

しかし、アイゾックは表情を崩すことなく、懐から一枚のプレートを差し出した。

「無論、タダでとはいませぬ。此度は手土産を持参しましてな」

「これは……何かの破片か？」

科学の心得を持たぬ凡人にとっては、ただのガラクタに過ぎぬであろうソレ 不気味な波長を放出するプレート片。

わずか数刻でその正体を悟つたゲイトは、思わず声を荒げる。

「いや、違う……」「これは」

その瞳は驚愕に染まり、輝きを増す。口元は自然と緩み、興奮に体を打ち振るわせる。

普段の冷静な様子とも、自己陶酔におぼれる姿とも異なる様相。今のゲイトは、さながら新たな玩具を手に入れた幼児だった。

それは、ゲイトが新たな発見に遭遇した際に見せる、誰にも披露したことのない本来の姿だった。無邪気に瞳を輝かせるその姿を見れば、誰も彼を異端児などと侮蔑しなかつただろう。

「……いいだらう。お前の計画に乗つてやるよ。ただし、世界は再生などしない」

アイゾックへと振り返ったゲイトの瞳には、先ほどの光は既に伺えない。

何かに憑かれたような 汚染されたような邪悪な目。  
鈍い輝きを秘めた瞳が見開かれ、狂宴の開幕を告げる言葉が放たれる。

「より崇高に進化するのさ！ ボクに服従するレプリロイドだけの世界に！ ボクが支配する楽園に！！」

そして、世界は新たな危機を迎える。  
シグマが人類に反旗を翻して以来、6度目となる争いの火蓋が切られた。

「そのためには肅清が必要だ。まずは連中を蘇生させて、各地の主要施設を占拠して「イツをばら撒けば……ククク、ハーハハハハハツ！」

未だ冷ぬ興奮に溺れるゲイトを尻目に、アイゾックは静かに独りごつ。

「青一才が。せいぜい儂の役に立つがいい」

# #1 NIGHTMARE (噩夢)

とある復興区域の郊外にて、

「クソッ、なぜあのようないでカブツが暴走を……」

警備隊長を務めるハイザーは苦しげに呻く。

それは着陸するや否や、いきなり暴走を始めたのだ。

中心部からは離れていて、遠遠な通常攻撃といい、直撃的な被害は避けられている。だが、かなりの攻撃を加えているにもかかわらず、敵は一切損傷を負っていない。

「こちらの武器が底を突いたら最後、この団体は間違いない市街への進行を開始するだろつ。

「撃て、撃て―――っ！」

号令に伴い放たれる怒濤の攻撃。

金属を跡形もなく溶解するレーザーも、機体を粉々に粉碎する//  
サイルも、相手には何ら効果がないようだ。

「ハラハラの世界で」

「みんな、無事か！」

突如、現場に駆けつけてきたのは一人のレプリロイドだつた。先ほど連絡の取れた、イレギュラーハンター本部のよこした増援だろ

それについて、この非常時にたつた一人とは何を考えているのか。

苦渋に顔をしかめつつ、ハイザーは現状を報告する。

「警備隊の隊長を務めますハイザーです！ 先ほどから攻撃を続けておりますが、市民街への進行を食い止めるのが精一杯の状況で

」

「分かった。後は俺一人で何とかするから、皆は市街へ被害が出ないよう見張っていてくれ」

「そう言つや否や、青いレプリロイドは巨大なメカニロイドへ立ち向かう。

相手はこちらの10倍以上の体格を誇る。まがりなりにも戦闘経験をつむハイザーにとって、目の前の男はあまりに無謀すぎた。

「そ、そんな……無茶です！ 」こちらの総攻撃でも、傷ひとつ負わない相手で

「

そこまで言つて、ハイザーは言葉を失つた。

暴走する巨体の影で子供が 小型のレプリロイドが震えていく。

る。

「バカなつ！ なぜあんなところに子供が！？」

巨体の死角にいた子供に気づかなかつた 自身の拭い様のない失態に歯噛みする。

幸か不幸か、メカニロイドの頑丈さと大きさが子供を守る盾となつていたようだ。少女に目立つた損傷は見つからないが、いつ巨体に押し潰されてもおかしくない。

「早く少女の救助を えつ？」

先ほどまで自分の隣に立っていたはずの、青いレプリロイドの姿がない。

気づけばその男は、ほんの数秒の間でメカニロイドのすぐ脇に移動し、優しく少女を抱き上げている。

「ヤハハ、名前は？」

「……ヨイ」

「ヨイちゃん、か。いい名前だね。でも、どうしてこんな郊外に？」

「……お花をさがしてたの。そしたら、あのおつきなロボットがとんできて」「

メカニロイドは一人を敵と認識したのか、巨大なペンチの左腕を振り上げる。そして、豪腕が猛スピードで振り下ろされ瞬時に斬り飛ばされた。

「なつ……！」

青いレプリロイドの手に握られるのはゲームサーベル。その破壊力に見合ひ高出力のため、ハンター部隊の中でも少數しか携帯を許されない武器。

それを田の前の男は、片手で楽に振るつている。

「お、おにいちゃん……？」

「せつか、怖かったね。でも、もう大丈夫だから」

片腕を落とされ後退するメカニロイドには田中やうす、そのレプリロイドは少女に優しい眼差しを向けている。

その慈愛に満ちた瞳 レプリロイドのものとは思えぬ、限りなく人のそれを彷彿させる双眸。そこでよつやく、ハイザーは男の正体を悟る。

「す、すいご。あの巨体をあつせり 隊長?」

「そんな、まさかあのレプリロイド……いや、あのお方は 」

かつて3度にも及ぶシグマの反乱を阻止し、レプリフォースの反逆も止め、先のコロニー落下事件すら防いだイレギュラーハンター。この上なく平和を愛し、唯一涙を流すことのできるレプリロイド。

「イレギュラーハンター ハックスー！」

セイバーを一時的に仕舞い、腕の中で震える少女の頭を撫でてやる。彼女の恐怖が和らぐまでもうしたかつたが、背後で騒ぐ巨体がそれを許さない。

そつと少女を地面へ降ろし、屈みこんで目線を合わせる。

「あの人たちのところまで、一人で行けるね」

「で、でも……おにいちゃんは？」

こんな状況でもなお、少女は自分の身を案じてくれている。あわと優しい子なのだろう。

「大丈夫、お兄ちゃんは負けないから！」

こんな子供を争いに巻き込むわけにはいかない。戦火に身を委ねるのは自分で十分だ。

その思いを胸に、未だ暴走を続けるメカーロイドへ向き直る。ハイザーの元に走り寄るユイは、途中でエックスの方を振り返り、

「おにいちゃん……がんばって……」

声援を背に、エックスは駆ける。

もとよつ隻腕だったメカーロイドは、左手までもを失った今、攻撃手段はビームしかない。

巨体から放たれる極太の光線を、エックスは軽い動きであっさり回避する。

「うおおおおおー！」

エックスの放ったバスターは、警備隊の攻撃すら防いだ強化装甲を、いつも容易く破壊する。

射出口も打ち抜かれ丸腰となつたメカニロイドは、そのまま再度サーベルツクスを押し潰そうと倒れこむ。

「甘いっ！」

幾度となく戦場を駆け抜けたエックスに、単調な捨て身の攻撃など通用しない。巨体の壁面を蹴り上げ、肩に乗り上がつたところでさらに跳躍。メカニロイドの頭上へ飛翔し、そのまま再度サーベルツクスを「生き友の形見を抜き放つ。

「これで終わり　　つー？」

セイバーで巨体を両断する刹那、エックスは確かに見て取つた。メカニロイドの中に蠢く『ソレ』の姿　　悪夢の具現を。

「……なつ

作業用メカニロイドD-1000の暴走は、プログラムの損傷に起因するものではなかった。そもそも、それは暴走ですらかった。内部に寄生したモノたちに操られていたにすぎなかつたのだ。

その事実に気づかなかつたエックスの判断ミスは致命的だつた。セイバーで断ち斬るのでなく、フルチャージで跡形もなく粉碎すべきだつたのだ。

巨体は膚のごとく切り裂かれ　　エックス自身の手により、破滅の引き金は引かれた。

外郭の役割を果たしていたD-1000が割られたことで、解き放たれた無数の『ソレ』の暴走を防ぐことは不可能となつた。そして悪夢は訪れる。

「な、なんだつ！？」

メカニロイドとも、レプリロイドとも判断のつかぬ『ソレ』ひとつ田の蛸のような、どす黒い機械。異形の軍勢は悉くエックを素通りし、彼の背後に控える警備隊へ襲い掛かる。

「くつ、来るぞ！」

「全員撃て　　つ！」

いきなり現れた未知の存在　　迫り来る不気味な姿を敵と断ずるのに、ハイザーは数秒も要しなかつた。彼の指令の元、部隊は一斉に攻撃を再開する。

しかし、『ソレ』は重力を無視するが如くの流暢な動きで、放たれたレーザーを避け、ミサイルの雨を掻い潜る。

そして容易に彼らの元へ到達し、剥き出しの下半身から垂れ下が

るケーブルを突き立てた。それはあつさりレプリロイドの外装を破壊し、彼らの中核に至り同化する。異形はたちどころに体内へと潜り込み、わずか数秒でレプリロイドとの一体化を果たしていた。

「ぐわっー。」

「くっ、来るな……うわ　　っ！」

「助け、助けてく……」

「ああ……」

部隊が、黒い異形に飲まれていく。

ウイルスにレプリロイドが汚染され、狂っていくその光景かつての悪夢を彷彿させる目の前の惨状を、エックスは呆然と見守る他なかった。

ついには完全に部隊を飲み込んだ異形は、瓦礫の隅で震える少女、ユイに迫っていた。

「おにちゃん　　」

「や、やめひー。やめるんだー。」

即座にロ・1000の机体から飛び降り、渾身のダッシュでユイへと向かう。

だが漆黒の機体はユイの眼前まで近づいていた。全力で加速しても間に合わない。

「助け　　」

直後、周囲が紅蓮に染まる。

弾薬が爆発でもしたのだろう。燃え盛る業火が異形を、部隊を、幼い少女を飲み込んでいく。

「みんな、コイ！」

ようやく彼らの元にたどり着いたエックスは、躊躇つことなく火の海に飛び込む。

幸い彼らはレプリロイドだ。その体は例え1000度の高熱でも、簡単に原型を失わない。

「コイ、どこにいるんだ！　コイ！」

そして更に幸運なことに、少女は爆炎の浅い位置にいた。  
即座に彼女を抱え上げ、転がるようにして炎から脱出する。

「オニイチヤン……」

「よかつた、コイ、無事で　　」

他の仲間も助ける必要があつたが、ひとまずは目の前の少女を救えたことに安堵する。

恐怖から開放されたのか、うつむいていたコイが顔を上げる。  
彼女の両肩に手を置き、エックスはその顔を覗き込み

「イ、イタイノ……グルジイノ……ダ、ダズベテ……」

「うわあつー

悲鳴を上げ、尻餅をついて後ずさる。

ユイの顔は黒く変色し、両の瞳は真っ赤なモノアイに変貌を遂げ、  
どす黒い液体を涙のようにに流出させていた。

そう、彼女は泣いていた。

幼かつた顔を苦痛に歪め、痛い、痛いと泣いている。

涙を流せるレプリコロイド　自分と同じように泣いているのだ。

「オニイチヤン……イダイ、グライト……」

あまりに痛々しい様相を前に、エックスは成す術なくただ後ずさる。

そんな彼に追いすがるかのように、爆炎の中からハイザーが、その部下たちが現れる。

「デッグズサン……ドウジデ、ボレラヴォ……」

「イダイ……イダイ……」

「グルジイ……ザブイ……」

歪な形相に血のよくなモノアイを掲げ、濁った涙を流している。

「あ……ああ……」

もはや異形と化した彼らに何をしてやれば  
不安を即座に払拭する。

大丈夫だ、彼らは、ユイはまだ壊れていない。

壊れてさえいのなら、きっと元通りになれるはず。

「皆、少しだけ待つてくれ。すぐにケイン博士に連絡を

」

突如、エックスの視界は光に包まれ、理解が追いつかぬままに吹き飛ばされる。

「ぐあつーー?」

変貌を遂げたユイが、ハイザーたちが一斉に单眼から光弾を放つたのだ。

「み、んな……やめるんだ……」

エックスの言葉もむなしく、攻撃はより激しさを増す。  
唯一人、無傷のエックスを妬うように。

惨状を前に成す術のない、無力な英雄を憎むように。

「デッグズ……ベッグズウウウ……

「ダジゲデ、ダヅゲ……」

「や、めろ……やめてくれ……」

降り注ぐ光弾の雨を全身に浴びながら、エックスはなおも懇願す

脳裏をよぎった

る。

「反撃などできるはずがない。彼らは善良なレプリロイドであり、イレギュラーではない。そう、彼らがイレギュラーのはずがない。」

「はやく……博士に連絡、を……」

まだ、彼らはイレギュラーと化していない。

希望を捨てなければ、信じていれば、きっと元に

「……オーライ、チャン」

コイと田が合った。

单眼から黒い滴を零し

閃光が辺りを包み、全てを吹き飛ばす。

ギガクラッシュ 自身の受けたエネルギーを数倍にして放出する破壊技。

もう一度と用いまいと思っていた。

もう誰も壊したくないと願っていた。

もう同じ過ちは繰り返さないと誓ったはずだ。

なのに、自分は

「ああ……」

光が収束を終えた後には、何も残っていなかつた。

巨大なメカニロイドも、謎の黒い機械も、ハイザー率いる警備隊も、コイも

「なんでだ……どうしてなんだよ……」

自身を包む白銀のアーマー。

シグマを倒して以来、封印していたはずの禁断の兵器。

それを自分は、コイに、まだ幼い、心優しいレプリロイドの少女に向けて放つたのだ。

「いつまで悲劇が続くんだよ…… 悪夢は終わつたんじゃなかつたのか  
　　っ！――！」

シグマは滅んだ。

世界を破滅に導く悪魔は消滅したはずなのだ。

なのに、世界はまたも悲劇を繰り返している。

これまで通りに。

これまでと何が変わることなく。

「うああああああああああああああ！」

英雄は空を仰ぎ咆哮をあげる。  
自身の無力さを嘆き。  
世界の理不尽を呪い。  
ただ、大粒の涙を流した。

エックスからわずかに離れた地点。

先ほどの余波に巻き込まれたはずの距離にもかかわらず、そのレ  
ブイロイドは無傷で佇んでいた。

「イレギュラーハンター……しょせんあの程度か……」

無様に地に付すエックスを見下ろし、レブリロイドは咳いた。  
渾身の一撃もあの程度。敵に回ったところで何ら問題はない。  
計画は全て、主の思惑通りに運ぶだろう。自分はただそれに従つ  
てさえいればいい。

だが、しかし

「奴の目から零れ落ちる液体は……」

天才から与えられたプログラムをもってしても、それだけが理解  
できなかつた。

## #2 HISTORY（歴史）

ようやく平穏を取り戻したかに見えた世界は、再び混乱に陥ることになった。

各地に出現した謎の黒い機械が、手当たり次第にレプリロイドを襲い始めたためである。取り付かれたレプリロイドは狂い、暴走しイレギュラーと化す。

ウイルスの再来とも揶揄される異形の軍勢に、生き残った人類は恐怖を込めて命名した。

### ナイトメア

「エックス、聞こえる？ 市民の避難は無事に済んだそうよ。あなたは現場を確認して、なにか手がかりがないか、特に怪しい人物がないか確認してちょうだい」

「ああ、ちょうど見えてきたというだ。すぐに調査を行うー。」

「現場は磁場の影響で通信が届かないわ。ぐれぐれも無茶はしない

で！」

エックスたちイレギュラーハンターは、指揮官シグナスの指令に従いナイトメアの情報を集めていた。

各地の被害報告と集めた情報をもとに、ナビゲーターであるエイリアが解析を行う。その結果、導き出された答え　ナイトメアは場所を問わず出現するだけでなく、複数の箇所を拠点にしている。そのひとつ　セントラルミュージアムの前に辿り着き、エックスはファルコンアーマーのブースターを切り着陸する。

「ここがナイトメアの出現地点か。なにか、事件を解く鍵が見つかれば……」

つい先日、エックスは目の当たりにした。

ナイトメアに寄生されたされたレプリロイドの末路を。苦しみに悶え、涙を流す少女の顔を。

あんな悲劇は、一刻も早く終わらせなければいけない。

「とにかく、まずは入って確かめないと」

壊れた入り口をバスターで破壊し、中へと進む。

入つて数歩も進まぬうちに、エックスは驚愕に襲われる。

「こ、これは……」

そこはナイトメアの巣窟と化していた。

軽く見ても30を上回る異形たちが、我が物顔で縦横無尽に飛び回っている。大量のナイトメアが、悪夢の具現が

「あああああ……」

脳裏によぎる悪夢を払拭するかのように、全力でチャージショットを打つ。放たれたエネルギーはナイトメアを焼き尽くし、10に近い固体を一撃で葬り去る。

それを機にナイトメアはようやく、自身の領域を侵す侵入者の存在に気づく。

そしてヒックスを認識するや否や、怒涛の勢いで光弾を放つ。さらに失った分を補つかのように、奥から複数のナイトメが出現する。

「ぐつ、数が多くさうる」

いくら打ち落としても、際限なく沸いて出てくる敵の群れ。全てがエックスへ照準を定め、我先にと無数の光弾を放つ。弾速は非常に早く、障害物を容易に貫通する。

「これじゃ、いくら相手をしてもきりがない。早く手がかりを見つけないと」

対面する4体をチャージショットでまとめて粉碎し、浮遊するナイトメアは挿し潜りダッシュで距離をとる。

そのまま加速しつつも、背後の確認は怠らない。何体か後を追つてきているのが見えたが、この間合いならまず追いつかれない。

「よしハ、ここのまま奥へ……つー？」

再度正面を向き、愕然とする。

背後に気を取られたわずかな隙に、複数のナイトメアが眼前まで迫っていた。加速したことが仇となり、すぐには方向転換ができるない。

即座にバスターを連射するも、敵は機械に似つかわしくない、柔

軟な動きで回避する。最前列の2体がエックス近づき、その顔面へとケーブルを伸ばし

「 だつ！」

すんでのところでセイバーを振りぬき、まとめて切り落とす。

「 だつ！」

残りはダッシュからジャンプをつなぎ、更にブースターを放ち飛び越える。今度は背後を振り返らずに、ただひたすら奥へと進む。ナイトメアで溢れかえる回廊を駆け抜け、2対のトーテムポールのような彫刻の間をくぐる。

「 ……え？」

途端に景色が一変する。

先の見えぬ一本道から、広い円形の、ドーム状の空間へ。あれほど蠢いていたナイトメアの気配も感じられない。

「 まったく違う空間に出た……」転移ゲートだったのか。別の地点に飛ばされたのか？

「 随分と時間がかかりましたな。お待ちしておりましたよ

予期せぬ声に振り返ると、岩に腰掛けた一体のレプリコロイド。

「 お初、お目にかかりますな。我輩、グランド・スカラビッチと申しまして

「

バスターがその頭部を掠め、背後の壁に大穴を穿つ。自身へと向けられる銃口にも物怖じせず、スカラビッチはため息をつく。

「やれやれ、挨拶を遮るとは感心しませぬな。最近の若者はやんちやが過ぎる」

「御託はいい！ いますぐナイトメアを停止させろーー！」

「それは無理な相談ですな。あ奴らは我輩の制御下にありませぬがゆえに」

だからこそ、邪魔の入らぬ舞台を用意したのですぞ  
ビッチの言葉を耳に、嫌な予感が頭をよぎる。スカラ

「……なら、お前たちの目的は何だーー！」

「それも存じませぬな。そもそも、我輩は貴殿の申す『ナイトメア』とは関わりを持ちませぬので」

田の前の男は、この事件の主犯ではない。関係者ですらない。  
なら、元凶はいつたい

「考え方ですか？ 無視とは感心できませぬな」

ハツと我に返り、再度スカラビッチを認識する。

問答無用で威嚇射撃を行つたことに罪悪感を感じつつ、同時に別の疑問も沸いてくる。

「「」の事件に何の関係も持たないなら、どうしてここにいる

一人逃げ遅れ、ナイトメアから逃れるために、転移ゲートをくぐった可能性もあつた。だがしかし、田の前の男は外の惨状を歯牙にもかけていない。避難民ならばここまで平然としているのは妙だ。

「目的、ですか。それは貴殿との邂逅ですよ、『ロックマン』」

「なつ……」

唖然とするエックスをよそに、スカラビッチはなおも語る。

「我輩、こう見えても遺跡めぐりが趣味でしてな。数多の地を駆け巡つては、歴史にまつわる情報を、逸話を収集しておりました。そこで巡り合つたのが　　貴殿の『伝説』ですよ、ロックマン！」

エックスへの視線が鋭さを増す。

「伝説として歴史に名を刻みし最強のレプリード。その力をぜひ我輩の前で披露していただきたい」

スカラビッチは座つていた岩から降り、その後ろ側へと回る。

「待て！　お前の言つことはわからないけど、ここから脱出するのが先だ。話ならそれからでも　　」

直後、巨石が猛スピードでエックスに迫る。スカラビッチが地面に両手をつき、両足で岩を蹴り飛ばしたのだ。  
エックスはかろうじて両手で受け止めるが、岩の勢いはまったく衰えず、そのまま壁へ叩きつけられる。

「ぐあー。」

「我輩の攻撃は、その程度では防げませぬぞ。貴殿ならもしかしたら、とも思いましたが、買い被りのようでしたな」

「ぐつ……やめるんだ！　こんな争いは無意味だ！」

「ええ、無意味ですとも。争いとは何も生み出さぬものです」

「なら、どうして　」

「それが歴史だからです」

問い合わせに返つてくるのは無情な答え。

「貴殿はレプリロイドの、いえ、人間の歴史をご存知ですか？　我々が生み出される遙か昔から、同族の殺し合いは延々と繰り返されてきたのです。つまり、歴史とは争いの　　血で血を洗つ  
闘争の繰り返しどうかなのです」

スカラビッチの両脇に、先ほどよりひとまわり大きい岩が生み出される。

「争いは避けられませぬ。シグマの反乱も、レプリフォースの独立も、起ころべくして生じたものでしょ？」

ふたつの巨石に重なるよつて更にふたつ、計4つの岩が展開される。

「お分かりですか？　歴史に刻まれし貴殿の伝説も、争いあって

の賜物なのです。ならばこそ、争いをもつてして貴殿の真価を見定めるのは当然のこと!」

そしてスカラビッチは右側に詰まれた岩を、下から連続でエックスヘと蹴り放つ。

(くそっ……やるしかないのか……)

バスターで手前の岩石を破碎し、ふたつ目はセイバーで切り捨てる。続けて飛んで来た3つ目はかわし、スカラビッチへチャージショットを放つ。

しかし、相手は手元に残した4つ目の岩に隠れることで攻撃をやり過ごす。そして今度はこちらの番、と更に岩を繰り出し、間を空けず複数蹴り飛ばしていく。

「我輩のグランドダッシュは攻防一体の役割を果たします。防戦一方では攻略など不可能ですぞ!」

飛び交う岩石をひたすら切り裂き、交わし、粉碎する。凌ぎ切つたと息つく間もなく、攻撃はより苛烈さを増す。わずか数秒の攻防の間に、スカラビッチの前には先ほどまでは比べ物にならない、その小型な体躯の20倍はある岩石が用意されていた。

「さあ、これは避けることも、防ぐこともかないませぬぞ。今こそ、貴殿の真価が發揮される時!」

その大きさに見合わぬ速度で、巨岩がエックスの視界を埋める。セイバーで切れるサイズではない。バスターをチャージする時間もない。回避は間に合わない。

轟音と共に、大岩が壁に激突する。

壁際にいたエッグスは回避すらままならず、そのまま押し潰されただろう。

あつけない。

あまりにあつけない決着だった。

待ちわびていた伝説の強者は、スカラビッチに傷ひとつ負わすことなく惨敗したのだ。

「なんと……これが、これが歴史に名を残した英雄だといつのか！」

『ロックマン』の伝説は、かくも脆弱なものだつたといつのか！

失望に声を荒げるスカラビッチだが、数秒とたたずく間に目を見張ることになる。

壁にめり込んだ巨岩が、確かにエッグスをひき潰したはずの岩が、

「……動いておる」

ありえない。

そもそも、敵はこちらの初撃すら満足に防げていなかつた。

先ほどの攻撃は、その10倍以上の威力を誇る。まともに食らつて、なお息があるはずがない。

「伝説だとか……英雄だとか……そんなことはどうでもいい……」

怒声と共に、巨岩に亀裂が入り、粉々に砕け散る。  
土煙の中から現れたのは白銀の輝き、そして

「繰り返させなんかしない！　争いは、ここで終わらせんーー！」

目を覆いたくなる光の本流。

あの巨岩すら碎くのならば、自分に防ぐ選択肢は存在しない。大岩を繰り出す怪力を誇るスカラビッチだが、俊敏性は並みのレプリロイドのそれと大差ない。慌てて横に跳ぶも間に合わず、

「があつー！」

両足が、自身の最大の武器が光に飲まれ消失する。無様に倒れこみながらも顔を上げると、すぐそばまで来ていたエックスがこちらを見下ろしている。

「見事です……さすがは、伝説のレプリロイド……」

エックスの手が迫る。

攻撃手段と逃走手段を同時に失つた今、自分の命はないだらつ。だが、後悔はなかつた。

もとより一度は滅んだ身。本懐を遂げて逝けるだけ幸福というものだらう。

「我輩の負けですな。さあ、このまま止めを

」

そのまま腕をつかまれ、持ち上げられ、エックスの肩に担がれる。

「ここにも、いつナイトメアが出てくるか分からぬ。今のうちに、早く脱出しよう」

「なつ、なにを？」

問い合わせには答えず、エックスはその場から踵を返す。

「我輩は敵ですぞ！ 敵に救いの手を差し伸べるといふのかー？」

「「Jの事件に関わっていらないなら敵じゃないさ」

「……我輩を助けるところ「J」とは、背後から撃ち抜かれることは承知の上、といつことですか?」

「お前はさつき負けを認めただろ。素直に負けを認めた奴が、今更そんなことをするのか?」

「虚言にて貴殿を欺く作戦かもしれませぬ」

「それは……そ、そこまでは考えてなかつたな」

『惑つるひに言つてつむか、決して自分を離さうとはしない。

「でも、俺は無駄な犠牲は出したくない。もつ、誰も失いたくないんだ」

誰も犠牲にしたくない　　その言葉に、今しがた出合つたばかりの自分すら含まれている。

そこに至つて、スカラビッチはようやく思い違いを悟る。自分は英雄という言葉に、何を期待していたのだろう。争いにて真価を發揮する?

ありえない。

この男は好んで戦場に立つたことなど、一度たりともありはしないだらう。

繰り返される歴史　　争いの渦中に巻き込まれ、その心に幾重もの傷を負つてきたに違いない。

強くなどない。まして最強のレプリロイドなどでは断じてない。弱く、儚く、とても脆い存在でしかない。

だが、しかし

「……これを」

「ん？　これは、何かのチップか？」

「我輩の戦闘データを含むパワーチップです」

「なつ、そんなの受け取れないよ」

「ひらを疑う様子は微塵も伺えない。

本当にどこまでも幼く、純粋で　　優しいレプリロイドだ。

「我輩がこの場所にいたのは貴殿と会うことが目的。その言葉に偽りはありませんが、舞台を選んだ『理由』は他にあります」

「……えつ？」

「我輩がこのセントラルミュージアムを占拠した理由。それは

「

「ぐわあああああつーー！」

「うわあつーー？」

背後からの衝撃に吹き飛ばされる。

痛む体を抑えて体制を立て直した時、エックスは違和感に気づく。

背中が、軽い。

つかんでいたスカラビッチの腕

腕から先が、ない。

「……スカラビッチ？」

後ろを向くと、数メートル先に左半身を消失したレプリロイド  
スカラビッチが目に入る。

「スカラビッチ！ しつかりしろーー！」

スカラビッチに駆け寄ろうとして、エックスは見た。  
空中に浮遊する漆黒のレプリロイド。

その周辺を覆うように、無数のナイトメアが群がっている。間違  
いなく、ナイトメアを制御している。

「お前が……殺したのか……」

目の間の存在は動かない。

口を開かず、首肯もしない。

だが、この場においての沈黙は肯定しているも同然だ。

「……どうして殺した

口封じ。

そんなことは分かりきつている。

エックスが聞きたいのは動機や目的などではなかつた。

「なんで……どうして殺す必要があつたんだーー。」

なぜその手段に殺戮を用いたのか。  
なぜ殺しまでする必要があつたのか。

「答えろー。 答えろよーーー。」

怒りに震えるエックスなど眼中にないのか、漆黒のレプリロイド  
はそのまま飛び去っていく。  
バスターを連射しても、纏わりついたナイトメアが盾となり攻撃  
が届かない。

「逃げるなーー！ 答えろおおおおーーー。」

顔を濡らす水の感触で、スカラビッチは重すがるまぶたを開く。

「スカラビッチ！ よかつた、生きてたんだ！」

泣いている。

レプリロイドが レプリロイドであるはずの男が、涙を流している。

「…………なぜ、歴史を、争いを繰り返してなお世界は……滅びぬか……」  
「ご存知……」

「もういい、しゃべるなー すぐに博士のところに連れて行くから

そうはいけない。

この機を逃せば、次は永遠に訪れないだろ？

一度は滅びを経験した身。自身の限界は既に把握している。

「争いのたび……かな、ら、ず……救世主……英雄が、現れるため……」

田の前のレプリロイドの表情が歪む。

彼もよひやへ語ったよつだ。自分の終わりを。

「民を導き……守り……世界を救う英雄、が……」

視界が黒一色に染まる。

センサーが限界に向かえたよつだ。

だが、幸いにも、頬を伝う優しい感触は未だ残っている。

「貴方なら、きっと光を……笑顔を……」

自分のような者の死すらも、哀しみ、涙を流してくれるレプリロイド。  
誰よりも心優しく、あたたかく、それゆえ誰よりも強いレプリロイド。

この男なら、この男ならばきっと

「世界を、救」

「……バカだな、スカラビッチ。俺は……俺が、英雄なわけないだ  
ろ」

かつてレプリロイドだったモノ。  
スカラビッチの残骸に向けて話しかける。

「ユイも……お前も救えなかつた俺が……俺なんかが　　つ

行き場のない感情をぶつけるように、思い切り拳を地面に叩きつ  
ける。

このまま泣き崩れてしまひたかつた。  
何もかも投げ出してしまひたかつた。

「俺は英雄なんかじゃない……世界を救うだなんて、大層なこと  
は言えない……」

でも、それは許されない。

目の前のスカラビッチがそれを許してくれない。  
彼だけではない。

もう何人も犠牲になつた。  
もう何人も救えなかつた。

数え切れないほどの悲しみが、苦しみが、痛みが、エックスの逃  
避を許さない。

「でも、約束する　　」

スカラビッチを横たわらせ、自身の頬を伝う涙をぬぐう。  
彼に渡されたチップをそつと握り、エックスは　　英雄は新た  
に決意する。

「争いは……悲劇は、絶対に終わらせる」

## #2 HISTORY（歴史）（後書き）

アイゾック「ナイトメア調査？」面倒だからお前らでやれよ  
エイリア「だそうよ、シグナス」

シグナス「だそうだぞ、ゼロ」

0「だそうだ、エックス」

X（早く新入りが来ないかな……）

### #3 LOYALITY(忠義)

「スカラビツチめ……やはり裏切ったか

ミコージアムの記録映像を眺め、ゲイトは憎々しげに言い放つ。だが、それも予想通りのこと。

そもそも、ゲイトはもとよりスカラビツチに何の期待も寄せていなかつた。スカラビツチは彼自身が手がけた『作品』ではないからだ。蘇生させて利用こそしたが、あれは所詮どこの馬の骨が生み出した欠陥品にすぎないのだ。

勝てば儲けもの、負けるのは当然といったところだろうか。だからこそ、いつでも処分できるようハイマックスを張り付かせ、『ナイトメアソウル』も埋め込まずにおいたのだ。

「それにしても、涙を流すレプリロイド、エックスか。あの老いぼれの言葉が本当だったとは」

役立たずの末路より、ゲイトにはそちらの方が重要だった。

イレギュラーハンター、エックス。あまりにも有名すぎるその名は、かつての研究同士　ゲイトにとつては、口うるさいだけの老害だった　から、プログラムが受付を拒否するほど自慢げに聞かされた。

涙を流せるという話は聞き捨てていたが、こうして田の当たりにすると否定の仕様がない。

「主よ、『涙』とは?」

ゲイトの背後に控える黒いレプリロイド、スカラビツチを破壊した張本人は、感情の伺えぬ声音で彼に問つ。

「人間が、感情が高ぶつた際に目から流す体液のことだ」　　ナイ  
トメアに寄生された固体のバグとも異なるようだな。レプリロイド  
への搭載に成功した例はなかつたはずだが……いいね、実に興味深  
い！」

研究者として的好奇心が、ゲイトを喚起に振るわせる。

赤色の瞳が不気味に輝き、衝動に促されるまま椅子から立ち上がる。

これほどの興奮はあの時、アイザックとかいうレプリロイドから、  
例のパートを渡されたとき以来だ。

「……決めた、決めたぞ！　あいつは生け捕りにして、そのプログラムを解析し须くしてやる……！」

「主、感情が高ぶるとは、どのような状態を指すのですか？」

興奮止まぬゲイトの様子を察することなく、レプリロイドは問いかける。目の前ではしゃぐ彼の主が、今まさにその状態なのだが、レプリロイドにはそれが何を示すのかわからなかつた。

感動に水を差された苛立ちか、ゲイトは彌々しげに吐き捨てる。

「お前には不要なものだよ」

レプリロイドとは、限りなく人間に近い存在である。そのプログラムは人の『心』と大差なく、当然感情の起伏は存在する。人前では勤めて冷静を装つゲイトですら、新たな発見の前ではそれに抗うことができない。

その定義に従えば、漆黒のレプリロイド　　ハイマックスはレプリロイドとも、メカニロイドとも異なる存在だった。

プログラムから感情を、『忠誠』を除く全てを排除した、ゲイトの忠実なる下僕。レプリロイドにして心を持たぬ、ただ主に隸属するだけの操り人形。それがハイマックスの正体だった。

「いいか、余計なことは考えるな。黙つてボクに従つてさえいればいい」

「了解しました。ゲイト様 我が主よ」

イルミナテンプル。

コロニー落下により多くの施設が破壊された今となつては、現存する数少ない水処理場。生き残る人々にとつては、欠かすことのできない重要な水源である。

そこに蠢く大量のナイトメアの様子が、急変したと連絡が入ったのがつい先日。これまで無差別に人々を襲っていたはずが、途端に施設を囲むように隊列を組み、その動きを停止したことだ。

施設に侵入を試みる存在には射撃を行うが、それも威嚇のつもりか命中率が低く、なにより接近しての寄生を行わない。

ナイトメアに占拠された地区を取り戻すのに、この機を逃す手立

ではない。

エイリアの通信による誘導に従い、エックスはイルミナテンプルまで足を運ぶ。

「……本当に、静止している」

ミコージアムで見境なく荒れ狂っていた様子と対照的に、まるで規律の取れた部隊のようだ。

「でも、いつまた動き出すか分からないな。ここは、慎重に進まないと」

罠である可能性は否定できない。

陣を組んでいるナイトメアは相当な数だ。これらが一度に襲い掛かってきたらたまらない。

なにより敵の急接近を警戒しつつ、エックスは少しずつ入り口へと足を運ぶ。

扉の目には警備員の如く、2体のナイトメアが両脇に待機し、上空にも何体か浮遊している。バスターで粉碎することも考えたが、それを境に襲つてくるかもしれない。

(危険が伴うが、こちらから近づいてセイバーで斬るしかない!)

寄生されかけたことはまだ記憶に新しい。だが、いつまでも足止めを食らうわけにはいかない。

(あと3歩、2歩、1歩　えつ！？)

エックスが一気に加速しようと構えた途端、扉を守護していたナイトメアが離れていく。

エックスの進入を放任、むしろ歓迎するが如く。

「これは……」

間違いない。

この先に待ち構える何者かは、あの黒いレプリロイド同様、ナイトメアを制御している。そして中で自分を待ち構えている。より一層、異の可能性が強まつた。だが

「いいだろう。そつちがその気なら、喜んで行つてやる!」

扉を開き、奥へと続く通路をダッシュで進む。施設内にもナイトメアはいたが、通路の両脇に佇んだまま、エックスの進入を邪魔する様子はない。

しばらく進むと、最奥を伺わせるひときわ巨大な扉が見え、エックスの接近を認知して自動で開く。

「さあ、来てやつたぞ! 姿を現せ!」

その相手は隠れなどせず、エックスに背を向け堂々と立ちていた。

背後で扉が閉まる音が響くと同時に、目の前の大型レプリロイドは頭部だけをこちらに向ける。

「来たか。我が名はレイニー・タートロイド。貴様を待ちわびていたぞ、エックス」

「お前が俺をここに呼び寄せたのか。お前も俺との対決が目的か?」

「分かつてゐるなら話は早い。我が主の命令の元、その身を貰い受

ける

「主だと……あの黒いレプリコロイドの」とかー？」

「これ以上の問答は無用。ござ、参るーー。」

その一言を開戦の合図とばかりに、タートロイドの装甲からミサイルが射出される。襲い来る無数のそれを、エックスはショットの連射で相殺する。

「なら、力ずくで聞き出すまでだ！ 僕が勝つたら、洗いざらし話してもいいだー！」

尚も放たれるミサイルをセイバーで斬りつつ、タートロイドへ肉薄する。

「その巨体ならかわしきれないだろー。」

全力のダッシュで即座に間合いを詰め、セイバーを斜めに振るつ。放たれた一閃は硬い手ごたえと共に弾かれ、タートロイドの体には傷ひとつ付いていない。

「もとより避ける必要は皆無ー。そのような玩具では、我が装甲を打ち砕くことなどかなわぬーー。」

再度甲羅の射出口が開き、ミサイルの群れが放たれる。極限まで接近している今、回避することはかなわない。

炸裂した衝撃に吹き飛ばされ、数メートル後方に崩れ落ちる。体制を立て直すエックス曰掛け、タートロイドは甲羅に籠り、高速回転して体当たりを仕掛ける。

「喰らうがいい！」

「ぐあつー。」

錐揉み回転しながら吹き飛ぶエックスだが、空中でブースターを噴射して体制を立て直す。勢いまでは殺せなかつたが、壁に衝突すると同時に壁面を蹴り上げ、タートロイドの頭上を取る。

「セイバーが効かないなら、これでどうだつーー。」

放たれたバスターはタートロイドを直撃し、何の傷跡も残さず霧散する。

「クソツ、バスターも通用しないなんて……」

「その程度で逃げ切れると思つなー。」

転がり壁に衝突するも、タートロイドの回転は止まらない。そのまま羅からは刃が突出し、壁を抉りながら登つてくる。

だが、その速度はそれほどものでなく、攻撃は単調な直線軌道にすぎない。先ほどのように隙を狙わなければ、直撃することはない。

壁から壁へ飛び移ることでかわし、一度地面へ降り立つ。

「猪口才な……これならばざうだー。」

エックスの後を追うように、タートロイドは体当たりを続ける。台詞に反して先ほどと何ら変わりなく、速度の上昇も見られない。ぎりぎりまで巨体をひきつけ、わずかに横にずれることで避ける。

すかさず再度バスターを構えると、

「天の怒り！」

その甲羅から、無数の水球が放たれ、降り注ぐ。

エックスを直撃した水球は凄まじい圧力で、その体を弾き飛ばす。

「くっ……」

エックスがよろめく瞬間を待ちわびていたように、タートロイドが襲い掛かる。

「クソッ」

かろうじて避けるも、降り注ぐ水球の雨はその勢いを増す。

上空から大量の水球をばら撒き、エックスの隙を縫うようにタートロイドが迫る。限られた閉鎖空間の中で、降り注ぐ弾幕と巨体の突進を同時に凌ぐのは至難の業だ。

水球はスターで破壊できしそうだが、立ち止まればタートロイドをかわせない。エックスは無我夢中で動き回るも、ついには疲労のあまり肩膝を付く。

「つあ　　つ！」

今度は先ほどのように体制を倒す余裕はなく、受身すら取れず吹き飛ばされる。

タートロイドは回転を止め、地を這い息を荒げるエックスをつまらなさげに蹴り上げる。

「ぐひー！」

「なんだその様は。 その程度の力で、この悲劇に終止符を打つと  
息巻いていたのか」

尚も倒れるエックスの首を掴み、眼前まで持ち上げる。

「うぬぼれるな小童が！ 真に幕引きを望むのならば、なぜ貴様  
は5体満足のまま地に付しておる！ その身が、心が砕け散る最後  
の瞬間まで足掻き、そして抗つてみせんか！」

直後、自身の拘束を解かれ、エックスは地面に落とされる。  
そしてターロロイドは追い討ちのように、エックスへと絶望を告  
げる。

「たつた今、待機させていたナイトメアの拘束を解いた。すぐにで  
も周囲のもの共を襲い始めるだろ？」

「な  
」

脳裏に悪夢が蘇る。

「や、やめろ……やめさせんんだー！」

「できぬ。奴らはすでに我の制御下を離れておる。もはや何者にも  
止められぬ」

「あ……あ  
」

怒りに肩が震える。

あまりにも矮小な自身に。

どこまでも無力な自分に。

そして

「タートロイドおおおおおおーーー。」

「怒りに身を委ねたつもりか！ 我に力比べを挑むとは……笑止！」

我武者羅に突き進んでくるエックスを、タートロイドは再度甲羅に籠り迎え撃つ。

たったこれしきのことで、理性を失い暴走するようでは救いようがない。それでは、この先生き残れない。

ならば、この手で引導を渡してやろう。

「終わりだ！」

迫り来るする巨体を、エックスはセイバーで斬りつける。高速回転する甲羅とセイバーの間で火花が飛び散る。

「無駄だ！！ 通じぬというのがわからぬ

そこでタートロイドは戦慄する。

動かない。否、動けない。

自身の全力の体当たりは、エックスの片手のセイバーに阻まれている。

「馬鹿な……なぜ後退せぬ！ なぜ退かぬ！？」

渾身の力で押し進むも、エックスは地に根を張ったように動かない。

押せない。むしろ、じちらが押されている。

ついに前進の勢いは完全に殺され、甲羅の回転も停止する。

「くつ……」

その隙にエックスはタートロイドに飛び掛り、拳で甲羅の水晶ミサイルの射出口を粉々に碎く。さらに突き入れた腕をバスターに変化させ、内部からタートロイドを打ち抜く。

放されたエネルギーは貯蔵されたミサイルを誘発し、大爆発を引き起します。

「うわあ　」

弱点を見抜かれた　　驚愕に目を見張るまもなく、タートロイドは崩れ落ちる。

エックスの動きは、先ほどまでとはまるで別人だ。はじめからこの力を出されれば、自分は10秒と立たずに沈んでいたことだらう。

「なるほど……それが貴様の、本来の力か……」

「どうしてだ　　なんでお前は悲劇を繰り返そうとするーーー！」

「それが、主の望みだからだ」

「主……誰かは知らないけど、命令されれば従うのか！？　お前の意思はないのか！－」

「……」

「お前の行動が主の命令なら、そいつは何を企んでる！？」

首謀者

は誰だ……」

「今、知る必要はない。先へと進めば、いざれ必ず合間見えたことになる……」

思つよつに動かぬ体を強引に起こし、タートロイドは今一度エッグスと対面する。

「Jの身には、ナイトメア制御の核が埋め込まれておる。ゆえに我を破壊すれば奴らの暴走は止まる」

「な」

「我を破壊し、先へ進め。そして主の元へ辿り着き その凶行に終止符を打て」

「こつた……お前は何を言つているんだ……」

「私は主に造られし命。歯向かつことも適わねば、意見することもできぬ。我に唯一許されたのは その始終を見届けることだけだった」

蘇生されたタートロイドが目の当たりにしたのは、変わり果てた形相の創造主だった。

その暴走は留まることを知らず、肅清と銘打ち数多のレプリロイドを犠牲にした。そして今なお、男は狂い続けている。タートロイドにできることは、ただ指をくわえて傍観すること。そして命じられるままに悪行に加担し、主と同じ罪を背負うこと。

そんな折に、愚かしくも主に歯向かつ存在を知った。かつてシグマの暴走を抑えたイレギュラーハンター、エッグスを。

生け捕りにする役割を、自ら進んで買って出た。

誘い出すためと偽り、ナイトメアたちを停止させた。

そして標的はこちらの思惑通りにその姿を表現し

見事に自

分を打ち倒した。

これなら、任せられる。

この男なら、主の暴走を止められる。

これでようやく、解放される

「無駄話が過ぎたようだな。さあ、我を打ち碎け！」

自分は卑怯者の臆病者だ。

己の解放と引き換えに、田の前の男は更なる地獄落ちるのだ。

「フッ  
」

五体がなくなるまで足掻け?  
心が砕けるまで抗え?

敵に投げかけた言葉に自嘲する。

主の暴走を止められず、まんまと生きおおせた存在が何を言つ?  
なぜプログラムに抗い説得しなかつた?  
なぜメモリが破損するまで抵抗しなかつた?

弱者は自分だ。

主の姿から目をそむけ、見てみぬ振りを続けた自分だ。  
だが、もう逃げない。

殻に籠つて逃避するのはもう終わりだ。

最後はこの役立たずの体を犠牲にし、田の前の男に委ねよう。

「恩に着るぞ、エックス……」

「いやだ」

「何？」

「俺は、お前たちの主を許せない。むしろ憎んでいる。でも、お前はそいつを助けたかつただけなんだろ！？ なら、悪い奴じゃない！」

「綺麗言を……躊躇うなー やるのだー！」

「いやだつ！ 殺したくなー！…！」

「日和つたか小僧！…！」

放たれる怒号に、エックスは叱りを受けた子供のよつて肩を震わせる。

「貴様は何ゆえこの地に足を踏み入れた！ 悪夢を終わらせるためであろうー。それがこのような場所で立ち往生するつもりか！？」

「やうだ。

自分はスカラビッチと約束したんだ。  
この悲劇を必ず終わらせると。  
ならば、立ち止まることは許されない。  
ならば、自分は、

「それでいい

震える腕で標準を合わせる。  
スターにエネルギーを充填する。

「涙、か。我むちのよつて訴る」とがかなえは……主を止められた  
であるつか」

「タートロイド……」

「かまうな。我に生きる資格はない。なにより　これ以上、主  
が狂つていぐのは見たくない」

チャージが完了する。

霞む視界で狙いを定める。

「IJの臆病者を許せとは言わぬ。ただ、主を　頼む」

限界まで溜められたエネルギーが解き放たれる刹那、紫の影が視  
界を横切る。

「え　」

巨大な斬撃が、タートロイドを一つに割る。

その勢いはそれだけに留まらず、背後の壁に巨大な爪痕を残す。  
爆炎が上がり、タートロイドは砕け散る。

「タートロイド　　つー

立ち込める黒煙の晴れた先には、先の紫の幻影は見当たらない。

「なんなんだよー。なにがビンなつてるんだよー。」

疲労の波が一気と押し寄せ、散らばる残骸のなかに倒れこむ。

「タートロイド……」めんよ……

その中に、ひときわ輝きを放つ緑の塊が転がっている。それは鮮やかな色彩に反して、どこか不気味な波長を繰り出してくる。

「これは

「

イルミナテンプルを出ると、大量のナイトメアが一箇所に折り重なるようにして、停止した機体で山を築いていた。

タートロイドは、ナイトメアの制御を手放してなどいなかつた。おそらく、はじめから誰も犠牲になることを望んでいなかつたのだ。

「タートロイド……

タートロイドを葬つた一撃。

セイバーもバスターも防いだ装甲を容易く切り裂いた斬撃。全てを空間ごと断裂させる破壊の刃。

その一撃は、かつてエックス自身も身をもつて味わつている。

「ゼロ……」

先の戦いで死亡した友。  
この手で破壊したはずの、かけがえのないパートナー。

「もしかして、君なのか」

疑惑を胸に、エックスは進む。  
数多の敵を打ち倒し、その屍の山を足場にし、

(主を  
頼む)

またひとつ、新たな枷を背負い、そして進み続ける。

### #3 LOYALHTY (忠誠) (後書き)

O 「シグマに殺されたかと思つたが、そんなことはなかつたぜ！」  
X 「いや、その設定無理ありますか？……」

## #4 CALAMITY(災厄)

「ク……クハ　　ハハ、ハーサハハツ……！」

タートロイドとエックスの対峙の瞬間。

あまりにも度し難く、どこまでも愚かしい茶番。

その一部始終を監視していたゲイトは、こみ上げる笑いを堪えられずにいた。

「タートロイドめ、やつてくれたな。この冷静な僕が……あまりのことにおかしくなつてしまいそつだ」

ハイマックスに次ぎ、自身に揺るがぬ忠誠を誓っていたはずのレプリロイド。その偽りの忠義を一時でも信じ、エックスとの邂逅を許した自分は極上の道化だろう。

思えばナイトメアを停止させた時点で、その兆候は伺えていた。奴ははじめから自分を裏切るつもりでいたのだろう。目的は今となつては理解できない。してやることすら腹立たしい。

仮にプログラムが自分への反逆を禁じていなければ、奴はあっさり寝返つたに違いない。あと少し、アイゾックの玩具を向かわせるのが遅れていたら、何をしでかしたか分からぬ。

そして、なにより

「「」のボクが……狂つているだと……」

道具の役割を放棄した屑が。

役立たず以下のタートロイドが。

「狂つていろだと……『主を頼む』だと……たかが道具の分際で、随分ボクを苛立せるじやないか……！」

生み出されたモノの分際で、その創造主を見下したのだ。飼い犬に手を噛まれるどこのの騒ぎではない。

「ふざけるな……ふざけるなあ……」

そり、あの醜悪な作品を造ったのは、蘇らせたのはゲイト自身なのだ。

タートロイドの愚かさを嘲笑っぽじ、それはゲイト自身へと降り注ぐ。出来損ないの道具を生み出した、馬鹿な主へと。

「……なぜナイトメアソウルを回収してこなかつた。ボクの命令が聞こえなかつたのか？」

身を焦がす憤りを呪きつけるよつて、背後にいたアイゾックを怒鳴る。

そんなゲイトに哀れみの視線を送り、老科学者は涼しげに受け流す。

「申し訳ありません。あれはようやく開発したばかりで、未だ制御が利きませんでしてな……」

「言い訳なんか聞きたくもない！　また同じ失態を繰り返してみる。貴様もろとも始末してやるからなーーー！」

「……肝に免じておくとしましょー」

既に姿を見られたことを警戒し、ハイマックスを向かわせなかつたのは失策だつた。あの胡散臭い男を闇~~ハ~~させるべきではなかつたのだ。

だが、それでも計画に支障はない。

母体が完成さえすればナイトメアソウルなど用済みなる。なにより、あれのプログラムは自ら手がけたのだ。奪取されたところで、何者にも紐解くことなど　自分にたどり着くことなどできはない。

そう自身に言い聞かせつつも、こみ上げる怒りは収まらず、ゲイトに更なる苛立ちを促す。

ターテロイドが始末された今、その矛先を向ける対象はもはや一人しかいない。

「イレギュラーハンターめ……思い知らせてやるーーー！」

地球首都、シティ・アーベルは、被災区域の中でも一際復興の進んだ区域である。ロロニー落下事件以降、多くのレブリロイドが率先して復活を手伝い、加えてケイン博士がシグマウイルスに対抗するワクチンを開発したことが大きかった。ついには、唯一人類が地上で暮らせる指定区域にまで回復したが、ナイトメアの一件で無残にも振り出しに戻されたのだった。

多くの政府役人や上流階級の人間は、以前にも増して強化された地下の防護シェルターに避難している。現在、地上で生活を送るのはレブリロイドのみ。それもナイトメアの強襲に怯え、屋内に引きこもり悪夢に震える毎日を過ごしている。

そんな現状に怯えることなく、ケイン博士は街の中央に聳え立つ高層ビル——イレギュラーハンター本部の一室に足を運んでいた。もとより避難生活など性に合わず、何度も脱走を試みたが、エッグスが決して許そうとしなかった。そんな彼が他ならぬエッグス自身に外出を許可されたのは、タートロイドとの一戦で入手した謎の物体を解析するためである。

「ふむ……レブリロイドを動かす核のようじやのう……。それにしても、このような種類のモノは見たことがないわい

「タートロイドは、自分にナイトメアを制御する核が埋め込まれていると言っていました。それに該当するのかはわかりませんがもしかすると、ナイトメアの暴走を抑制できるかもしれません」

そうであるなら、ナイトメア解決には大きな一步だ。

仮にそうではなくとも、プログラムを解析して特徴を掴めば、影で暗躍する首謀者を暴き出せるかも知れない。

「とりあえず、まずはコイツのプログラムを解析してみるとするか。エイリアくんも手伝ってくれんかのう～～～

「了解しました。エックス、これから私は一時的にサポートから外れるけれど……」

「大丈夫だ。俺よりも、博士のサポートをお願いするよ。戦場に向かうのは、俺一人で十分だから」

「エックス……」

その言葉に、エイリアの胸はつぶれそうに痛む。

自分はエックスのサポートという役割に就いているが、これといった手助けをできていない。

現場に同行したところで、戦闘用でない彼女には最低限の装備しか搭載されていない。むしろ足手まといにしかならないだろう。

自身の安全が保障された司令塔から、現場へ伝言を送ることが精一杯。しかも今回は敵の通信妨害が激しく、それすらもできずにいたのだった。

そんな自分が、ようやく役に立てる。

ナイトメア解決の糸口を、自ら掘むことができるかもしれない。

「わかったわ。一刻も早く、この核を解析して見せる

決意を声に出さうとした瞬間、大気を揺るがす轟音が響く。

「なつ、なんじゃー?」

「今のは……爆音か!」

「エックス、緊急事態だ! 外を見ろー!」

慌てて研究室に乱入してきたシグナスに言われるまま、エックスは部屋を出て、窓から外を伺う。

「な、なんだあれは

」

大量のナイトメアを引き連れた巨大なメカニロイドが、街を、逃げ惑うレプリディドたちを襲っている。

以前倒したD-1000もかなりの大型だったが、眼前の人型はそれを遥かに上回る。巨人が歩くたび大地は悲鳴を上げ、その進撃を遮る建造物は遍く倒壊する。

メカニロイドは、両の掌を構えるように合わせ火球を放ち、その周囲に浮遊するピットが手当たり次第にレーザーを放つ。明らかに対象を定めていない無差別攻撃は、瞬く間に辺りを火の海に染め上げる。

あるものは火炎弾に焼き尽くされ、あるものはレーザーに貫かれ、あるものは倒壊する建物に巻き込まれる。

運よくそれらから逃げおおせた市民も、待ち構えていたナイトメアの狙い撃ちで息絶える。あるいは反応できずに寄生され、苦しみもがき狂っていく。

悲鳴が、悪夢が、絶望が街を飲み込んでいく。

もはや復興の先駆けとなつた景観は見る影もなく、阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

「エックスー!？」

「戻れエックス！ ひとまず討伐部隊を編成してから」

背後からの静止を振り切り、窓を破ってアーマーで飛翔する。出しきる限りの最速をもつて、暴れ続ける巨人にと大災害の渦中へと飛び込む。

ある程度近づいて見上げると、やはり大きい。その握りこぶしひつ見ても、自分の3倍ほどのサイズを誇る。

あまりにも圧倒的な体格の差は、それだけで勝敗を決してしまいかねない。この巨人が相手では当てずっぽうにバスターを撃つたところで、蚊の刺すほどの効果しか与えられないだろう。

だが、いかに巨体といえど弱点は必ず存在する。

ひとまずその顔を目指して接近するエックスだったが、途中でのメカニロイドの背後へと目を凝らす。

「あれは……」

巨人の後に群れるナイトメアの中に、一体だけ紛れ込むレプリロイドの姿。小柄な団体のため遠目では見逃していたのだろう。

黒の集団を隠れ蓑に浮遊するそいつは、崩壊する町並みを眺めて喝采を上げていた。

「ホッホー！ いいぞイルミナちゃん。ぜんぶまとめて、ぶつとばしちゃえ～！！」

イルミナ メカニロイドのことか。

だとすれば、あの巨人はナイトメア同様、このレプリロイドの指示に従っているのだろう。

「お前があのメカニロイドを連れてきたのかー。今すぐ虐殺をやめ

「ん~? イレギュラーハンター……なんかメンドーだな~」

ヒックスの怒声を心底どうでもよせ方に受け止め、レプロロロイドは彼へと向き直る。

「ギャクサシ? そんな下品なものじゃなこせ。これは『駆除』だよ。おの方にジャマな虫ケラを、みんな口口しちやうためのね」

「なに……」

敵は今、何を言った?

眼前に展開される地獄模様を『駆除』と。

無残に散つていくレプリトイドたちを『虫ケラ』と。

「あのお方の世界に、キタナい虫はこらなんだよ。でも、ほつておいたら害虫はムゲンに増えるだる~。だからボクがジーフォン様がわざわざ掃除しに来たのさ」

「ふざけるなよ! メカニロイドとナイトメアの暴走を止めろ!」

「ヤバーンな言葉づかいだね~。うん、キミもキタナいな。口口やう。口口してもつとキレイにしなくちゃ。おのお方の理想郷を」

尚も狂言を並べる敵に、ヒックスはそれ以上言葉を交わす気はなかつた。

スカラビッチやタートロイドとは違つ、決して分かり合つことのできない存在。

平和に暮らしたいだけのレプリトイドを『害虫』と譴り、その命を

奪うことの躊躇しない存在。

「イレギュラーめ！ これ以上、お前の好きにはさせない……」

「いけ~イルミナちゃん！ あの虫ヶラを始末するんだーー！」

ミジオンの指示に従い、メカニロイド イルミナはエックスの方を向き、掌を合わせ火球を放つ。

「くつ  
」

唸りを上げ飛び交う炎塊は、その大きさを持つてエックスの視界を遮り、バスターでの相殺も許さない。

アーマーの機敏性を活かし、空中を縦横無尽に飛び回ることでかわす。しかし、火炎の連射は恐ろしく速く、その隙間を縫つようにレーザーが放たれる。

戦闘舞台は広大な空中だが、行動範囲には限界がある。その領域を端から火球と光線が埋め尽くしていく。加えて視界を遮る遮蔽物がなく、敵に動きを完全に読まれている。

ついには火球のひとつが逃げ回る標的を捕らえ、たちどころに全身を包み焼き尽くす。エックスは炎の衣を身に纏い、重力に従い墜落する。

あつけなさに拍子抜けしつつも、ミジニオンは新たな害虫を探そうと、無様に散っていく汚物から視線をはずす。直後、その瞬間を狙つたように、下方からバスターが放たれる。

「イッたあー！ なんなんだよー、もー

予期せぬ不意打ちに背後を振り返ると、真下から猛スピードで迫り来るエックスの姿。

「あ……マズ」

言い終わるよりなお早く、セイバーで袈裟斬りにされる。更に縦にも一閃が走り、体が4つに両断される。

「よし、これでメカーロイドの暴走が止まれば……」

分断されたミジーノンの体はその機能を失い、イルミナとナイトメアも活動を停止するはず

「虫ケラの分際でやつてくれたな～」

「なんだと」

4つに切り分けられた残骸は、落下することなく浮遊を続けている。プログラムがその機能を失っていない証拠だ。

そして、更なる驚愕がエックスを襲う。

ミジニオンの体が断面から修復されていく。しかも、4つのパーティは一体化するのではなく、それぞれがミジーノンを形成していく。

「「「お前は、ボクの手で口口してやる……」「」」

またしても判断ミス。バスターで消し飛ばすべきだったと、かつてと同じ過ちを犯した自分を恨む。

もつとも、斬られた端から再生するビシリカ、分裂するレプリロイドなど前代未聞だ。ヒックスの想像が及ばなかつたのは無理もない。

「イルミナちゃんは虫ケラビもひねりつぶせ

「コイツはボクが始末する」

主の命令に従い、イルミナはエックスを無視して街への破壊活動を再開する。背後に群がっていたナイトメアたちも、市民を直接襲撃するべく散り散りになつて飛んで行く。

このままでは1時間とたたずアーベルは完全に瓦解するだらう

「ぐつ、させるか」「

「お前の相手はボクだ！」

「よそ見する余裕はないぞ！」

「これでも食らえー！」

「ホツホーウー！」

後を追おうとするエックスへ向けて、4つの水塊が放たれる。

「こんなもの……」

水塊はミジニオンと同等の大きさを誇るが、イルミナの火球に比べれば豆粒同然。これなら十分相殺は可能だ。

スターを乱れ打ちするも、水塊は飛散することなく無数に分裂して飛んで来る。

4つの水塊が8つへ、そして16へ。避けきれずに2発、胴体と顔をガードした右腕に食らう。触れた箇所が、灼熱を浴びたようになる。

痛む。

「くつ……これは酸か！？」

続けざまに放たれる酸を避けるため、上空から地面へと降り立つ。右腕の損傷を確認　問題なく動く。それほど強力なものではないのだろう。機を伺うため瓦礫に身を潜める。

だが、時間が経つほどイルミナにより被害は拡大するだろう。イレギュラーハンター本部が襲われない保障もない。

隙を見て、ミジニオンを倒さなければ。

ギガクラッシュなら4体まとめて吹き飛ばせるが、相手の放つ酸ではエネルギーを補充できない。敵が一箇所に固まれば、チャージショットでも粉碎できるが　そこで、背後から気配を感じる。ミジニオンではない。そこには、先ほど拡散したナイトメアが一體、こちらに近づいていて、

「くそつ！」

「見つけたぞ！」

ナイトメアを破壊したことでの、ミジニオンに位置がばれる。

だが、あの程度の酸なら瓦礫で十分防げるはず。身を隠すようにして、エックスはバスターを構えるが、

「アローレイ！」

敵の放った光線は瓦礫を貫通し、エックスのすぐ横の地面を焼き貫く。

建物でわずかに狙いがずれたのだろうが、直撃すればタダではすまない。そして、この攻撃は隠れていてはやり過ごせない。

「出てきたな！　逃がさないぞ！」

「アロー・レイを食らえ！」

「ルシファラーゼに溶かされろー！」

「ホッホーワー！」

エックスの姿を見定め、ミジニオンは怒涛の勢いで攻撃を放つ。

（くつ……なんとか、エネルギーを充填できれば　　）

ルシファラーゼはその役割を果たさず、アロー・レイは試しで受けるには危険すぎる。

思つように反撃できずに逃げ続けるエックス。ミジニオンはその後を追い、イルミナとナイトメアは更に街を破壊し続ける。

「どうすれば……あ　　」

そこでエックスの視界に飛び込んだもの。

逃げ遅れ、ナイトメアに寄生されたレプリロイド。黒い涙を垂らすモノアイがエックスを捕らえ、

「　　アア……」

それはエックスを敵と認識しての行動か。

あるいは、わずかに残った意識がそうさせたのか。

その瞳から放たれた光弾が、圧縮されたエネルギーがエックスを直撃する。

「……ありがとう」

「や～っとオーラー！」はおしまい？ なら、そのまま死んじゃえ～  
！」

一斉に放たれるアローレイ。

それらを避けようともせず、エックスは両腕を交差させ、倍増したエネルギーと共に解放させる。

「ギガクラッシュ～！」

溢れ出すエネルギーが辺りを灰燼に帰す。

放たれた光はアローレイを打ち消し、マジニオンは断末魔すら許されず4体とも消滅する。

跡形もなく消し飛んでは再生もできないのか、再度出現する気配はない。

街の一角と多すぎる市民を犠牲に、アーベルを襲つた突然の災厄はようやく消失した はずだった。

「え……？」

異変はすぐに訪れた。

暴れ狂っていたイルミナが行動を停止

その巨体を小刻みに

震わせている。

「ま、まさか　　」

もとより、ミジーニオンを倒したところで巨人の暴走が止まる保障などなかつた。最悪の場合、司令塔を失つたことで暴走する可能性も　否、それなばまだ幾分救いがあつた。

主を潰せば止まる　　イルミナをナイトメアと同一視した、あまりに安直な考えが再び災厄を引き起こす。ミジーニオンを撃破したエックスの行動が、またしても破滅の引き金を引く。

震え続けるイルミナの体に無数の裂傷が走り、内部から光が蓄えられていた膨大なエネルギーが漏れ出している。あの巨体を稼動させ続けたそれが解き放たれれば、その威力はギガクラッシュの比では到底ないだろ？

「そんな……」

どうあがいても止められない。

攻撃したところで破滅の瞬間が早まるだけだ。かといって、あの巨人を傷つけずに動かす術をエックスは持たない。

もちろん、未だ混乱の渦中で戸惑う市民を先導し、あまつさえ避難する時間などありはしない。

ただ唯一、エックスに許された行動。  
それは

「　　つー！」

全力で破壊の圈外へ離脱すること。

今まさに犠牲となる大衆を見殺すことで、我が身を庇い逃げ出すこと。

ブースターを全力で射出し、出した限りの速度で飛翔する。  
そして、アーベルは破滅の光に覆われる

轟音が鳴り響く。

背後から凄まじい衝撃に襲われ吹き飛ばされる。

「くつ  
」

ブースターを噴射するも、纏わり付く暴風に抗えず不恰好に飛ばされる。

何度も回転を繰り返し、どちらを向いているのかもわからぬままに飛ばされる。

数十秒　　あるいはもつと長かったかもしない時間を経て、よつやく勢いから開放された体は自身の制御下に戻る。

「  
……」

そのままどこかへ飛び去ってしまえば。

背後の惨状を目につることなく逃げ出してしまえば。

イレギュラー・ハンターの責務も、何もかもを捨てることができたのならば、まだ彼には救いがあった。

だが運命が、なによりエックス自身がそれを許さない。苦痛からの開放を、悲劇からの逃亡を決して許さない。世界はどこまでも無慈悲にエックスを絶望へ追い立てる。

「あ……ああ」

自爆したイルミナの跡には、数kmにも及ぶ巨大なクレーターが広がっていた。

それはアーベルのおおよそ半分もを消滅させ、7割以上の市民レプリロイドを道連れにしていた。

せめてもの救いは、地下シェルターの人類は無事だということ。イレギュラーハンター本部がからうじて被害を免れていたこと。そして 真っ先に逃げ出した自分がのうのうと生き延びていること。

「くそつ……くそお つ……」

イルミナに壊され、ナイトメアに乗つ取られ、爆発に巻き込まれた彼らは何を思つただろう。

悲劇から背を向け一人逃走する自分を田の間たりにしていたら、いつたい何を思つただろう。

自分も一緒に犠牲になることを望んだだろうか。死出の道連れに無力なこの身を欲しただろうか。

そうしていれば 少しでも救われたのだろうか。

でも、それだけはできなかつた。

それはどうしてもできなかつた。

自分が死ねば、悪夢は誰にも止められない。

ゼロも亡くなつた今、悪夢に終止符を打てるのは自分しかいない。

それゆえ、エックスは何を犠牲にしても生きねばならない。

十を超える仲間を失い、百を超える敵を葬り、千を超える部外者

を犠牲にして生きねはならない。  
ハスバード

それが彼の  
罪なのだ。  
かつて友を己の手で殺めた、血塗られた英雄の

狂った宴の終わりは、未だ遠い

## #4 CALAMITY(災厄)(後書き)

エイリア「通信係で十分でござる。働きたくないでござる」

シグナス「空気でも結構でござる。働きたくないでござる」

X「先輩、そろそろ復活してくれませんか？ 僕もつ死にやうです

よ

O「だが断る

## #5 GEHENZA（煉獄）

マグマエリア。

ウイルスの汚染などもろともせずに、燃え盛り荒れ狂う紅蓮の世界。かつて土地開拓が計画されたものの、あまりの危険性にどう人種からも放置された煉獄。

人の気配は愚か、レプリロイドすら近寄るのを躊躇する炎の牢獄。そんな危険区域をなぜわざわざ占拠する必要があつたのか 考えるだけ無意味である。

そこにゲイトの意思は存在しない。

彼はそのような愚行を犯しあしない。

それは一体の狂ったレプリロイド イレギュラーと呼んでも差し支えのない、ブレイズ・ヒートーシクスの独断に過ぎないためだ。

「火火火……来いい……来いよ

無意味に見える火山帯の制圧 むしろ籠城に近いその行為も、ヒートーシクスには大いに意義のある行動だった。  
彼ははじめからナイトメアの散布など目的にしていなかつた。あまりに増えすぎたレプリロイドをナイトメアという篩に掛け、真の強者を炙り出す主の行動には共感できた。だが、そんな雑事をわざわざ自分が手がける必要はない。ゲイトに忠実なタートロイド辺りにやらせておけばいい。

自分の目的はひとつ。

選別を掻い潜り、見事に生き延びた兵をこの手で焼き尽くすこと。マグマエリアの占拠も、配置した数体のナイトメア・スネークも。全ては自分を止めに来るであらうついレギュラーハンターたちへの洗礼にすぎない。

「己と対峙するのは強者だけでいい。

マグマに飲まれるような、ナイトメアに殺されるような弱者など  
知つたことではない。

「速く来いい……速くオレ様の下に辿りつけ……」

火山帯に陣取つてからおよそ一月　　自身にとつては長すぎる  
時間をヒートニックスは耐えてきた。

身を焦がす衝動をナイトメアを燃やすことだからうじて抑えてき  
たが、それも既に限界に近い。自分に従う傀儡を何匹焼いたところ  
で、それは鎮静剤の役割すら果たさない。

ヒートニックスは耐ってきた。

耐えて耐えて耐えて、そして耐え続けてきた。  
だが、それも今日までだ。

主であるゲイトから連絡が入ったのはつい先日。その手駒を3体  
も葬つたイレギュラーハンター　　かつて最強と称された戦闘用  
レプリロイド、マグマード・ドラグーンすら打ち破ったという真の  
猛者。それがこのマグマエリアに向かっているとのことだ。

生け捕りにしろとの命令だったが、従つつもりは毛頭ない。

ようやくだ。

ようやく戦える。

ようやく焼き尽くせる。

ようやく全力でやり合える。

へざひく

「エックスウウウウウウウ！」

レプリロイドを殺せる

マグマエリアに足を踏み入れたエックスを出迎えたのは、通常のナイトメアとは異なる円環状の巨大なメカニロイドだった。

それも目の前の個体で既に4体目。進入して早々、あまりにも手荒な歓迎にエックスはかなりの疲労を感じていた。

「お前らの相手をしている暇はない！」

それでも退かない。

エックスは決して後退しない。

逃げない。

休まない。

立ち止まらない。

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର - ୧

相手の攻撃は体当たりとエネルギー弾の射出、たつたの2通りしかない。見切ること自体は容易いが、こちらの攻撃も思うように効果がない。その体の4隅に位置する核以外は、一切のダメージを無効化するためだ。

加えて敵はかなりの耐久力を誇るため、嫌でも持久戦を余儀なくされる。

それを3体も撃破、今なお4体目と対峙するエックスのエネルギー  
ーが枯渇せずにいるのは、ひとえにセイバーのおかげだった。

「はあっ！」

掛け声と共に、相手の核を斬り碎く。全ての核を失つたことで、メカニロイドはようやく大破する。

「ハルヒ、ここへおと向かいのんだ」

セイバーの柄を強く握り、構えなおす。

敵に攻撃の機を与えず、速攻で斬り捨てようと踏み込んだ刹那、

「火火火火火火——！ 待つてたぜえ……待ちくたびれたぜええええ！」

妄執を感じさせる叫び声。

次いで飛来する巨大な炎の塊

否、それは一体のレプリカイ

十一

大きく広げた翼に炎を纏い、高速でこちらを目掛けて飛んでくる。迸る熱は周囲の岩壁を溶かし、進撃の軌跡を地面に刻む。

それは5体目の円環を核もろとも一撃で粉碎し、エックス目掛け  
て襲い来る。

「うめあつ」

突進 자체はかるうじて避けるが、それに伴い火の粉が降りかかる。たつたそれだけで体が損傷し、ダメージを負うのが分かる。まともに食らえば、おそらく跡形も残らない。

不意打ちをかわした侵入者を褒め称え、レプリロイドは壁にぶつかる直前で急上昇し、左右に翼を広げて宙に浮く。

「オレ様はブレイズ・ヒートニックス！ ナイトメアどもを止めた  
きや、オレ様を殺<sup>や</sup>るしか手はないぜえ～！？」

いきなり乱入してきたレプリロイドは、自らがナイトメアの支配者であることを暴露した。嘘と受け取ることもできたが、相手の態度からして事実だろう。

勝利に搖るがぬ自信を誇つてゐるのか、それともナイトメアのこ

など眼中にないのか。

どちらにしても好都合だ。

敵が血ひの前に、ナイトメアより呑き連ねずに躍り出てきたのだ。

あとは倒すだけ。

それだけで、悪夢は解決に向けてまた一步進む。

「さあ、存分に殺させて  
あ？」  
や

なぜこれほど心が痛むのだろう。

相手はおそらく「ジーラン」の同類、根っからのイレギュラーとみて間違いない。

撃破を躊躇う理由など、どこにもないはずなのに。

「なんだあ……その腑抜けたツラは？」  
本当にテメエがエックスか

エックスの霸気のない表情に、ヒート一ックスはわずかに眉を細める。

だが、怪訝そうな顔をしたのもほんの一瞬。すぐに喜色の笑みが戻り、興奮に声を張り上げる。

そのテンションの上がり具合に呼応するように、燃え盛る炎が激しさを増す。

「いくぜええええーー！」

翼をはためかせ、炎を纏つた羽 焰槍と化したそれを無数に飛ばす。

広範囲に及ぶ必殺の攻撃を、隙間をくぐるよつにかわす。反撃とばかりにスターを放つが、敵は両翼を前に交差させることで防ぐ。

「 んだよ

ヒート一ックスの瞳に炎が宿る。

攻撃を受けたことにに対する不快感。だが、それは自身への反撃に苛立つたわけでは、ましてダメージゆえのものでは決してない。

「殺<sup>や</sup>る気あんのかああああ！？」

あまりにも脆弱な一撃、予想を遥かに下回る軟弱者への怒りだった。

ヒート一ックスを覆っていた翼が左右に大きく開かれ、先ほどの倍近い焰槍が連射される。

標的にはかわすのに手一杯で、反撃すらままならぬようだ。

「なんなんだよテメエはよおおおおおおおーーー！」

羽を舞い散らすのに加えて、口から火炎弾も放つ。たったそれだけのことで、エックスはえなく火達磨と化す。

死んでこそいなかつたものの、ヒート一ックスから失望を買うには十分だった。

「弱すぎんだよおおおおおおおーーー！」

炎に焼かれ悶えるエックスめがけて、追い討ちとばかりに突進す

る。

全力の半分のスピードも出さず、炎も纏つていなかつたが、やはり相手はまともに食らい吹き飛んでいく。無様に地面に横たわり、立ち上がらうとする気配すらない。

弱い。

あまりに弱すぎる。

こんな弱者との対決を待ちわびていたのではない。  
こんな馬鹿げた戯れのために衝動を抑えていたのではない。

「テメエを殺のをどれだけ待つたと オレ様がどれだけ苦しんだと思ってやがる！ 割りに合わねえ！ 割りに合わねえよお！」

！」

ヒート一ッシュスの事情など知つたことではない。狂気に陥つたイレギュラーのプログラムなど理解できるはずがない。

今のエックスに戦闘狂の相手ができる余裕は残つていなかつた。  
そして、それはダメージやエネルギー残量の問題ではない。  
E・エネルギー・カートリッジや治療用のナノマシンで解決できる問題ではない。

い。

「殺る氣でこなけりや、このまま殺つちまうぜえーー？」

ヒート一ッシュスが再び浮かび上がる。  
扇状に広がる両翼が炎に包まれ、その大きさを2倍ほどに膨張させる。

炎を纏つた超高速の体当たり ゴッドバード。

地獄の業火が眼前に迫る。  
煉獄の炎が近づいてくる。

エックスは視界を覆つそれを、地に這い蹲つたまま呆然と見つめていた。

「これで終いかよおー!? あつけねえなああああーー!」

焼かれるべきなのかもしけない。

議性こよひに著さうの葉をも。

焼き尽くされ、その身に刻んで死んでいくべきなのかもしれない。

「それにもよおう、とんだお笑い種だつたぜえええ！」

心が、  
精神が、魂が身体ものより離脱されでぬる瞬間

「いやなチキン野郎が……あのソラグーンを殺したってのは何者だねえやうやくおおおお……！」

その発言は失望ゆえのものだった。

罵倒や叱責の類ではなく、堪えきれぬ不満を感情と共に吐き出し

カナヘモモエハタスヒナヒ

ことになつた。

力尽き、今まさに死の淵に瀕した英雄に、狂氣といつ名の活力をみなぎらせる。

「 ああ？」

確実に、射程圏内に入っていた。

確実に、仕留められるはずだった。

そもそも、相手は地に転がつたままで、体制すら立て直せずにいた。

それがなぜ 自分の最速の一撃を避けられた。

「なんだよオイ…… やっぱり強えんじやねえかよおおおおお…」

だが、そんな些細な事はどうでもいい。

見限つたはずの標的が、自身の奥義を退け立っている。その事実だけで十分だ。

やはり相手は強かつた。

やはり相手は強者だった。

やはり相手は自分の同類 あるにはそれ以上の戦闘狂だった

のだ。

そうでなければ、数多の猛者を屠つた「ラジーバード」を凌げる筈がない。

「やめろ……」

「ああ！？ 聞こえねえんだよ。みみつけい戯言なんぞよー

弱々しいヒックスの声を搔き消す。

そしてすかさず搔きぶつをかける。

「ホントよお～、殺したくて仕方ねえんだろお～？ テメエのやのバスターで何もかもブチ壊してえんだろ～？」

「…………違つ」

「……で逃げられては困る。

「……で弱者に戾つては困る。」

「どうしてオレ様を殺そうとしたしねえんだあ？ 殺したくてウズウズしてんだりお～！？」

「違つ…………違つ…………

煽りねば。

焼き付けねば。

「ビッチとかいう糞虫も、いけ好かねえ//ジンジンも、鈍闇な亀野郎も殺してみせただろお～！？」

「違つ、違つ、違つ」

更に猛つてもらわねば。  
更に狂つてもらわねば。

「分かるぜえ～、殺しは病み付きだよなあ～……屈強な野郎共が原型を留めず大破する瞬間はよおおおお～！」

「違つ！ 違つ違つ違つ違つ……」

最高の殺し合いをするために。  
最強の存在を引き出すために。

「違つ！－！俺は

「違わぬえ。おおきな本を読むのが、いいやつだ。」

エックスの脳裏に悪夢が蘇る。かつて禁断の兵器をその身に纏い、多くのレプリロイドを蹂躪した。

荒れ狂う獣も、儀に忠実な衛兵も、尋常な勝負を望んだ武人も  
笑みさえ浮かべて虐殺した。  
殺戮の先に平和があると信じて 立ちはだかる全てを皆殺し  
にした。

「地獄の業火もよおへ、慣れちまえば生温いもんだぜえ～！」

ヒート一ヶクスの翼が更に燃え上がる。

今度は全力で、最大出力のゴッドバードを食らわせる。

立ち竦むエックスを焼き尽くすため。

自分と同格の存在を灰燼と帰すため。

「狂ったイレギュラー同士、最高の殺し合いといこうぜええええ  
えええ！！！」

今度は逃がさない。

今度は避けさせない。

かわす暇は与えない。

不死鳥が全てを抹消する刹那、茫然自失に陥つたエックスと目が  
合い

「死ねえええええええ  
え」

正に先の攻防の再現だった。

目で追うどころか、理解することすらかなわなかつた。

気づけば自分の両翼が、両腕が、両足がなくなつていた。

それでいて首だけ無事なまま残すとは。

なんて悪趣味な野郎だ 悪態をつく間もなく、制御を失つた

身体は勢いに飲まれ壁に衝突する。次いで地面に叩き付けられ、何

度も転がり土を舐める。

「火火<sup>カカ</sup>……」いつあスゲエぜ。オレ様なんざ遠く及ばねえ  
性の化けモンじゃねえか」

真

垣間見たエックスの中に潜るもの。

凄まじい狂気だった。

素晴らしい強さだった。

待つた甲斐はあった。

死ぬだけの価値はあった。

これほどの強敵は後にも先にも、この男を除いて現れないだろう。  
かつてない最高の殺し合い、その感動に酔いしれたまま果てよう  
としたとき、

「俺はお前とは違う　　お前たちイレギュラーとは違うーー！」

一瞬にして興奮が冷めた。

最強の力を誇る魔人が。

極上の狂氣を身に纏う修羅が。

なおも泣き言を漏らすなど何たる無様。

「テメエのバスターは何人碎いたよお！？」

「黙れ……」

「そのセイバーで何人ぶつた斬つてきたよお！？」

「黙れ  
黙れ！」

「何人殺してきやがったよおおおおーー！」

「黙れ！！」

「同類が言つなら間違ひねえよお！ テメエの向かう」の先は

L

果て無き闘争、終わりのない無限地獄よ

頭を打ち抜く。

呪いを吐き続ける口を黙らせるが、元氣。

## 脇体を粉々に碎く。

地獄の業火をかき消すように。

切り落としたした四肢も吹き飛ばす。

不死鳥が一度と蘇らぬように。

転がり出たナイトメアソウル

悪夢を終わりにするために、

壞す。

壞

喪して喪して喪して喪して

壊して壊して壊して壊して壊して壊して壊して

「あ？」

そこで戻る。

そして田にしつしまい。

そして理解していしまう。

その三の獣、てしのくにはが、かきのを

「うすだよ。」  
「はぐとも瓶つめにすんだ。」

「あ……ああ

L

バスターを通常のアームに戻す。

亡き友の唯一の形見を  
血塗られた武器を投げ捨てる。

泣き叫びながら脇田も振らず走り出す。

ヒート一ヶクスの残骸から田を背け、煉獄の出口を目指してひた

すら走る。

心がちた。

原型すら留めていないはずのヒートマップが

不死鳥さえも殺してみせた自分が、ただ怖かつた。

レーザー研究所。

光化学の最先端を行くその施設は、ゲイトの御眼鏡に適うだけの技術力を保有していた。よつて彼は制圧の人選に、もつとも防護に長けたシェルダンを抜粋したのだった。

事実、その人選は間違つていなかつた。

シェルダンは研究所を制圧して以来、レプリロイドの一切を近づけさせずにいた。

ただ一人を除いては

「はじめて……キミがここ の管理人で間違いないかな？」

シェルダンに過失はない。

ゲイトに手抜かりはない。

狂いが生じたとすれば 誰も来訪を予期しなかつたであろう、

第三者の手によるものだった。

「いかにも。拙者はシールドナー・シェルダン、この施設の守護を命じられている」

紺色のアーマーに、目元を覆うバイザーが特徴的なレプリロイド。飄々としたその風貌に反して、こちらに一切の隙を伺わせない。

なるほど、確かに手強い。生け捕りは骨が折れそうだ。

田の前のこの男こそが、主から聞いていたイレギュラーハンターと見て間違いないだろう。

「ガードとして、何人たりともこの地に踏み入らせん。立ち去られよ」

通じるとは思わないが、形だけの対話を試みる。

「そういうわけにはいかないなあ。ここ最近すこへく退屈してて、ちょっと溜まっちゃってるんだよね」

想像通り相手は口元を二日月に歪め、赤いネルギー状のブレードをその手に構える。

濃密な殺氣にも怯むことなく、対するシェルダンも両肩のシールドを外して構える。

「はじめから殺す氣でいくから、死んでも化けて出ないでね」

「よかねえ、ござ参られよーー。」

男の笑みはどこか幼く、それでいて底知れない邪悪さを秘めていた。

#5 GEHENNA (煉獄) (後書き)

ミジンコ「チキンはお前だ」

焼き鳥「虫ケラはお前だ」

X「スカラビツチを殺したのは僕じゃない！ タートロイドも勝手に死んだんだ！ 僕のせいじゃないぞ 僕は悪くない……」

O「とうとう限界が来たか……でも俺は動かない」

## #6 GUARDIAN（守護者）

「エックスはまだ戻らんのか……」

「はい。敵地にいるのか通信もつながりません」

強襲した巨大なメカニロイドの爆発により、アーベルの街は半壊した。

交通機関や医療設備は軒並み全滅。自警団も壊滅的な被害を負つたため、直撃を免れたイレギュラーハンター本部は率先して生き残りの救助と被害状況の確認に当たった。

調査が進むにつれ明らかになる被害の全貌。あまりに絶望的なその数字を前に、誰もが憤りを隠せなかつた。

死亡したレプリロイドは約5000体。負傷者を含むとその数は倍にも達するだろう。

ハンターベースも負傷者の収容を受け付けているが、その有様は目を覆いたくなるほど凄惨なものだつた。

そして、それを目にしたエックスは無言のまま立ち去つた。

その場から目を背けるように。

その光景を直視しないように。

逃げるようになにかしらの理由でベースを後にし、一人敵陣へと赴いたのだ。

「すべての拠点を調査し終えるまで、ハンターベースには戻らないつもりなのかもしません」

「そんな……無茶じや！　あの『カブツ』を倒してから、口クにメントナンスも受けとらんのに」

「今のエックスは危険だ。」

ただひたすら、一心不乱に前へと突き進んでいる。

振り返ることで、更なる犠牲を見過さないよう

立ち竦むことで、悔恨の念に押し潰されないよう

だが、このまま事件を解決しても、エックスはきっと救われない。数多の犠牲を生み出した自分を、彼は決して許せはしないだろう。例え首謀者を倒しても、生涯にわたり自分を責め続けるだろう。

「エックス……気づいて」

犠牲と救済は相対するもの。

確かに、敵の策謀により数え切れない犠牲が生まれた。だが一方で、彼の手は多くの救いをもたらしたのだと

「ぐ……ぬ」

「あれ？ 今度こそ仕留めたと思つたんだけどな～」

開戦からおよそ1時間。並みのレプリロイドであれば、4回は殺されていたであろう長期戦。

シールダンが未だその生命機能を保っているのは、長年ガードと

して培つた特殊な戦闘スタイルにある。

完全な後の先。

両手に構えた盾で敵の攻撃を受け流し、その隙を狙つて殴打する。決して必要以上に踏み込まず、自分からは攻め入らない。

原理はあまりに単純明快。それは技と呼ぶにも値しない、言わば子供の児戯にも等しい。しかし、警護を本職とするシェルダンはそれだけで十分事足りた。

必要なのは守ること。

大切なのは庇うこと。

我が身は主の盾に過ぎず。

己が使命は守り抜くこと。

敵を切り裂く剣も、打ち碎く拳も、貫く銃も不要の道具。

一枚の盾だけをその手に、言つことを聞かぬ身体に鞭打ち、再び

臨戦態勢 防御の姿勢をとる。

「あのさあ……キ!!」さつきから何がしたいの。はじめからぼくを殺す気ないよね?」

つまらなさそうにこちらを睨む男。

一見してまるでダメージが伺えないのに対し、ショルダンは全身にくまなく傷を負っていた。両手に携える盾こそ無傷なもの、致命傷を避けることが精一杯。反撃する余裕など 勝ち目など微塵もありはしなかった。

「語つて聞かせたところで、お主には理解できんよ。お主のような

傭兵風情にはな」

途中からわかつていたことだ。

田の前の男はイレギュラーハンターなどではない。

「へえ、どうしてぼくが傭兵だと思つたんだい？」

「お主の動きは、相手を殺す」ことに特化し過ぎておる」

ガードとして数多の相手を退けてきたシェルダンである。ならず者との戦闘経験は人一倍多く、その行動パターンも熟知していた。相手の技は殺し屋の類に近く　　それでいて、これまで対峙したいずれの敵よりも苛烈で鋭かつた。

「それだけ？　退役軍人かもしれないでしょ」

「これほど頼狂な男がレプリフォースのはずがない」

「ははっ、それもそうだね」

面白そうに笑う男だが、その手には依然としてエネルギーブレードが握られている。その緋色の刀身が自身に向けられ、同時に柄の反対側からも刃が形成される。加えて相手の殺氣が一段と増す。

間違いない。敵は次の一手で勝負を終わらせるつもりだ。

「それじゃあ、そろそろお別れの時間かな。もうキミで遊ぶのは飽きたやつたし　　つまらないからね」

敵は両刃と化した武器を構えなおし、踏み込みと同時にシェルダン田掛けて投げつける。

容易に武器を手放したことには意表を突かれたが、高速回転する刃は防げぬ攻撃ではない。進んで丸腰となつた敵に違和感を覚えつつ、左手の盾で受け流す。

「はい、お終い」

先ほどどの攻撃は単なる囮。  
気づけば相手は背後にいた。

常に壁を背に戦っていたはずが、攻防の際に移動させられていた  
ようだ。それすら把握できぬほど疲弊していたのか。相手のペース  
に呑まれていたのか。

咄嗟に背後を振り返ると、そこには先ほど投げ捨てたはずの赤い  
ブレード。両刃の武器は元から投擲用の消耗品だったのだ。

「グッバイ」

早い。

とても反応できない。

「無念

」

容赦なく振り下ろされる死神の鎌。

シールダンが己の死を覚悟したその時

「やめうおーー！」

室内に響き渡る怒声。

次いで放たれるエネルギーの波動。

男は声の方向を向くと同時に、手にしたブレードを高速回転させて攻撃を防ぐ。

「ん~、こいつは驚いた。もしかしてエックスのボウヤかい?」

「それはこっちのセリフだ! 生きていたのか ダイナモ!…」

突如戦いの場に現れた第三者、エックスの問いかけに傭兵ダイナモは意地の悪い笑みを浮かべる。

「それはこっちのセリフだ~……って言いたいとこだけど、ボウヤは生きてると思ってたよ。元気そうで何より……いや、大分お疲れの様子だね」

へりへりと軽口を叩きつつも、ダイナモは内心驚きを隠せずにいた。予期せぬ闖入者 エックスの乱入もそうだが、なによりはその様相である。

その勢いに反して霸氣の伺えない瞳。

見るだけで痛々しい満身創痍の身体。

纏うアーマーこそかつてと同じものだが、刃を交えたときの勇ましさは微塵も伺えない。自分の知る男と同一人物かすらも疑わしくなる。

「だいたいさつきのはなんだい? 不意打ちは防がれちゃ意味ないでしょ。もつと殺すつもりで撃たないと まあ、それで殺されても困るけどね」

「黙れ! そもそもお前がなぜここにいる? ナイトメアにじこまで関わっている!…」

「いや～、ボウヤがシグマの田那を殺しきってから暇でね。適当に生き残りを狩つて遊んでたんだけど……」「……

言ひや否や、ダイナモは現状を理解できず「立けぬくシルダ

ンを蹴り倒し、おもむろに側頭部を踏みつける。

ぐぐもつたうめき声が聞こえたが、気にせず更に力を込める。

「『ナイトメア』だっけ？ 流行には敏感でね。こんなに賑やかなパーティなのに、傍観者に落ち着くなんてもつたいない」

「今はお前にかまつている暇はない。邪魔をするな」

「おこおこ、何を言つただい？ キミがぼくのジャマをしてるんだ  
う

成す術なく平伏すシェルダンを見下し、その眼前にブレードの刃先を突きつける。

「このオモチャはとんだ不良品でね、作り主に賠償を請求したいよ

そのままブレードを喉元に押し込もうと、柄を持つ手に力を込め  
る。その途端、左手を衝撃が襲い握っていたブレードが弾き飛ばさ  
れる。

エックスがバスターで打ち抜いたことはすぐに理解できた。弾か  
れたブレードは やはり壊れていなし。全力で擊てば破壊など  
容易だつたものを。

思わず口から溜息がこぼれる。

「やれやれ、こんなガラクタまで庇うとはさすがエックスくんだ。

相変わらず懲りないねえ」

「……黙れ。すぐにここから出て行け！」

「あんまり首突っ込んでると、そのつけ痛い目見るよ。いや、その顔はもう見てきた後なのかな？」

ようやくシェルダンから足をどけ、ダイナモはブレードを拾い上げる。

「なんにせよ、ここでボウヤと出会えたのは僥倖だったよ。せつきも言つたけど、退屈してたんでね」

それきりシェルダンには田もりやらず、代わりにエックスの方へと視線を向ける。

獲物を狙う、ハイエナの目。バイザー越しの瞳が不気味な輝きを放ち、口元の笑みが更に深まる。

「コイツは見逃してあげるよ。その変わり ボウヤにつきあってもらおうかなっ！」

言い終わるより速く、両刃のブレードを展開してエックスへと放つ。

ロブレード 持ち手の両端からエネルギーの刃を展開できる、ダイナモ愛用の両刃刀。投擲にも特化したそれは中距離戦、遠距離戦共に高い性能を誇り、柄を携帯することで用意に持ち運びが可能な優れものだ。

ダイナモがいくつ隠し持つていてはわからないが、数に限りがある以上、凌ぎ切れば勝機は見出せる。

飛来するブレードは打ち落とすことができたが、まずは身体をひ

ねつてかわす。

そして、その判断は正解だつた。

気づけば敵はすぐ傍まで迫つてゐる。投擲と同時に自身も駆け出していたのだ。もし打ち落としていたら、ブレードに氣をとられていたら、次いで繰り出される斬撃に反応できなかつただらう。

慌てることなく、ダイナモにバスターの照準を合わせ、

ホントはよおー、殺したくて仕方ねえんだろお

身体が硬直し、相手を仕留める機を逃す。

すかさず後退するが間に合ひはずもなく、ブレードで体を斜めに斬られる。

「ぐあつ……」

「イケナイねえ。ちやんと殺す氣でやらないと こんな風にね  
つー」

更に引き下がるエックスを追い撃つよつて、ダイナモはロブレードを立て続けに2枚投げる。

エックスの体制から重心まで見切つた上での攻撃。一投目をかわせば相次ぐ2投目を避けられない。バスターなら相殺できるかもし

れないが

「へんわ」

エックスは一枚目のブレードを避け、2枚目は強引に素手で受け止める。

しかし、高速回転するブレードの柄を見切る技量など彼にはない。ブレード部分を無理やり掴むと、高熱が即座にその手を焼く。

「うあああああ

」

「おいおい、無茶はよくないぜ」

そんな隙だらけのエックスを嘲笑いつつ、ダイナモはがら空きの胴体に廻し蹴りを叩き込む。

そのまま崩れ落ちるエックスからブレードを奪い、相手の首筋へとあてがつ。

「お話にならないね。ボウヤは殺しまでするつもりはなかつたけど

」

そこで言葉を切り、ダイナモは脣の両端を吊り上げる。

だが、その表情に反してバイザーに隠れた瞳には一寸の笑みも伺えない。

先ほどの嘘偽的な瞳とは異なる、汚じ~~ノリ~~リでも見るような目つき。

「今のボウヤ、ちょっと見苦しそうねえ。やつぱつこいで死んでもらおつかな？」

あえて首元から刃を放し、わざと大袈裟に振りかぶつてみせる。

かなりの隙を見せたはずだが、やはりエックスは無反応。既に心が死んでいるようだ。

よし、殺そう。

これなら生かす価値はない。  
腕抜けを生かす価値はない。

「アディオス」

凶刃が頭上に迫る。

死が目の前に迫る。

振り下ろされる一撃は、確実に自身の脳天を叩き割るだろう。  
そう理解しつつも体が動かない。どこかで死を受け入れているのだろう。

ならば、それもいい。

いいや、それでいい。

死ねば皆に会える。

死ねば彼らに謝れる。

犠牲となつた彼らの前で、何万回でも謝罪しよう。

そつと目を閉じ、終わりの瞬間を待ち構え

「ぬん！」

「え　　」

赤い刃を、鈍色の盾が防いでいる。

倒れていったはずのシェルダンが、敵である自分を守っている。

「おーおー、どうして大人しく死んでくれないかなあ。キミ、ち  
よつとしつこちぎだよ」

「なんで……俺を庇う」

殺された方がいいはずだ。  
助けるだけ逆効果のはずだ。

なのに、なぜ

「その言葉、そのままお主に返そ。なぜ拙者を助けた？　真に悪  
夢の終焉を望むならば、拙者を助ける理由はないはずだ」

「や、それは　」

「同じことだ。任務や使命ではない、決して譲れん一線があるのよ  
そのままブレードを弾き返し、再三ガードの体制をとる。  
疲労困憊の守護兵は、今一度敵に立ち向かう。

「拙者はガードだ！　故に命ある限り守り抜いてみせる！　傭兵よ、  
この身が朽ち果てるまで、拙者の相手を勤めてもらひや！」

「ん~、死に際の頼みとあひちゃあ断りづらうね。3分だけだよ」

しかし悲しいかな。

絶対的な実力の差は、たとえ命を懸けたところで埋まらない。ダイナモが刃を振るうたびに、シェルダンに刻まれる傷が増える。ダイナモの攻めは勢いを増し、シェルダンは疲労の色を濃くする。

「やめろ……」

重すぎるバスターを持ち上げ、虚ろな瞳でダイナモに狙を定める。

殺すしかない。

殺さねばならない。

相手はかつてシグマに加担した極悪人。しかも殺せばシェルダンを守れるのだ。

免罪符は既に入手している。

躊躇う理由はどこにもない。

なのに 打てない。

「やめろ、やめろッ！」

また、守れない。

また、救えない。

また、助けられない。

また、目の前で誰かが死ぬ

「もうやめてくれっ！――」

ダイナモのブレードがシェルダンを捕らえる。

集約したエネルギーが胴体を貫き、そのまま横に振りぬかれる。シェルダンの両手から盾が零れ落ち、その下半身が千切れ飛ぶ。

「ジャスト3分。いい夢見れたかな？」

ダイナモは上半身だけとなつたシェルダンを片手で持ち上げ投げ捨てる。

エックスが震える足でそこに近づくと、相手がうつすりと目を開いた。

「エックスよ、無事か……」

死に瀕してなお、敵である自分の身を案じている。  
涙がこぼれた。

醜く顔を崩し、ただひたすらに涙を流した。  
恐怖に慄き、敵を見殺しにした自分の弱さに。  
命を掛けて、敵さえ守り通したシェルダンの強さに。

「なぜ、泣く。涙を見せる……」

「俺は……あなたほど、強くないんだ」

「はは、何を申す。拙者など任務の完遂すらかなえられず、拳句に自害した臆病者だといつのに」……

「え　　」

「なんだ。やつぱり欠陥品だったんじゃない」

割つて入るように嘲笑つてくるダイナモを睨み、同時にその拳動を警戒もする。

しかし、当の本人は襲つてくるビームか手にしたブレードを仕舞い、その場に座り込み静観し始める。

「ダイナモ……お前は　　」

「ああ、続けて続けて。」つちは気にしないでいいから」

「……感謝するが、傭兵よ」

「なうに、愉快な喜劇に水を差すほど無粋じやないよ」

「」の男は自らシェルダンを手にかけておきながら、最後の言葉すら喜劇と嘲笑うのだ。

エックスは怒りに肩を震わせたが、シェルダンの方は気にした様子もない。

「かつて拙者は要人の警護を勤めていた。だが……拙者は博士のイレギュラー化を防げず、結果その命を奪つた」

助けられなかつたことを嘆いた。  
守りきれなかつたことを悔やんだ。

だが以上に、初めて経験した殺しが恐ろしかつた。  
盾で相手を叩き潰した感触。

護衛対象を自らが殺めたという事実。

そのおぞましさに耐え切れず、シェルダンは自ら命を絶つた。

「拙者は傷つくことを恐れたのだ。他者を傷つけ、自らも傷つくことに怯えたのだ。それゆえ全てを放棄し、『死』という道へ逃げたのだ」

だが、エックスは生きている。

たつた一度の失敗で絶望した自分とは違い、一生懸命に生きている。

死に逃避することもなく。

任務を投げ出すこともなく。

イレギュラー化することなく。

生き続け、立ち向かい続いている。

「しかし、お主は今なお茨の道を歩んでいる。多くを救い、多くを犠牲にし、己の心に数え切れぬ傷を負いながらも　　お主は逃げておらん」

それが強さでなくなんだといつのか。  
それが勇猛でなくなんだといつのか。

「その過程で取りこぼしは生じたかもしけん。犠牲になった者も生まれたかもしけん」

自責の念に駆られただろう。  
非業を嘆き苦しんだだろう。  
幾度となく涙を流しただろう。  
だが、決してそれだけではなかつたはずだ。

「それでも　　拙者はお主に救われた。わずか数刻生きながらえたおかげで、此度はガードの役割をまつとうして逝くことができる」

犠牲と救済は表裏一体。

犠牲だけのはずがない。  
救済がないはずはない。  
その道が悲劇だけだったはずがない。  
その道に救いがなかつたはずがない。

「これは

「

「拙者のDNAデータと……この施設で研究開発されたアーマーのパワーアップデータだ。圧縮エネルギーの刃……データが」

最後の力を振り絞り、シェルダンはエックスに2枚のチップを渡す。

そこで限界が来たようだ。

全身から力が抜け落ち、急速に意識が震む。

思い返してみれば、一度田の生もやはり情けないものだった。

「拙者は腰抜けの敗残者……逃げるなど、戦えという資格はない。」  
だが

田の前の男は主の敵だ。見殺す理由こそあれど、あえて庇う理由などなかつたはずだ。

自分はまたも任務を放棄し、無様にその生を終えようとしているのだ。

なにがガードの役割をまつとうしたか。

不埒者の進入を許可した拳句、標的を擁護した愚か者が何をまつとうしたのか。

自分はただの役立たずだ。あの傭兵に言われたとおり、救いようのない欠陥品だ。

結局、何一つ成し遂げることなどかなわなかつた。  
それなのに、なぜだろうか。

「夢忘れるでない。お主の手により……確かに救われたものがここ

にいたことを  
」

エックスを守れたことが、なぜか妙に誇らしかったのだ。

シェルダンは機能を停止した。

これだけ損傷が激しければ、ケイン博士でも修復は不可能だらう。  
また守れなかつたのだ。

それどころか守られたのだ。

無様な自分を庇つたせいで、シェルダンはこいつして息絶えている。  
シェルダンは自分のせいで死んだのだ。  
自分の弱さがシェルダンを殺したのだ。

それなのに

「守られたのは……救われたのは、俺の方なのに……」

『救われた』と言つたのだ。

「これじゃあ、『救えなかつた』なんて言えないよな

常に自らを責め苛む怨嗟の声。  
絶えず自身を蝕む亡者の嘆き。

それは自ら生み出したものだった。  
失つたことばかりを悔やみ続た。  
失つたものばかりを数え続けた。  
誰も救えなかつた。

否、誰も救えないと思つていた。

喪失はあつた。

別れもあつた。

数え切れない犠牲があつた。

だが

「救え、たんだな……」

シヨルダンから手渡された2種類のチップを握る。

最強の盾を。

最強の矛を。

そこには確かに救いがあつた。  
そこには確かに救済があつた。  
血塗られたはずの己の手が。  
壊すしか脳のないバスターが。  
守り通せたものがそこにあつた。

「まだ、守れるものがあるなら。俺の手でも、まだ救えるものがあるのな」

「

エックスの身体が光に包まれる。  
身体を覆うアーマーが変化する。

るのな」

戦いの果てに手にしたもの。

守り抜いた先に得られたもの。

新たな力をその身に宿し、英雄は絶望の淵から這い上がる。

「先に続くのが地獄でもいい！俺は、最後まで戦い抜いてみせる  
守るために……」

エックスの決意を祝うよ。アリス。

英雄の門出を祝福するよ。アリス。

その場に似つかわしくない拍手が響き渡る。

「ラボー、素晴らしい文芝居だったよ！」

一部始終を見届けたダイナモは茶化すように喝采を送る。

「いつも涙腺が緩むなんて、ぼくも年かなあ。お涙頂戴、やつぱり  
キミたちは見ていて飽きないね」

「——寧にバイザーまで取り外し、大げさに田元をねぐつていい。  
もちろんその瞳は潤んでなどおらず、口元には馬鹿にしたような笑  
みが浮かんでいる。

ダイナモは露骨な泣き真似を終えると、その場から立ち上がりブ

レードの柄を取り出す。

「じゃ、さっそくお披露目してもうおつかな。キミが得た新しい力をね！」

それに応えるように、ヒックスのバスターの射出口が輝き出す。かなりのエネルギーを溜めている証拠だ。

ダイナモは柄から刃を展開すると同時に、疾風の如くのスピードで駆ける。

「先手必勝っ！！」

相手のバスターが復活した以上、遠距離戦では部が悪い。一足飛びで急速に間合いを詰め、そのままロブレードを振りかざし頭上から斬りつける。

ツバメ返し　　高速で放たれる斬撃は広範囲に及び、接近することでの回避も許さない。

エックスはエネルギーの充填を終えたようだが、撃たせる暇はない。敵が照準を定めたところで、こちらの攻撃はその首を刈り取るだろ？

「ああ、どう出る？　それとも　　そのまま死んじゃうかい？」

ブレードがエックスを捕らえる刹那、下を向いたバスターからエネルギーが射出される。

それは衝撃波として拡散されず、圧縮されることで直線を刃を形成していた。

「なにつ！？」

「ダイナモ つー！」

敵の攻撃は遠距離専用と早合点して、迂闊に接近したのが仇となつた。

Dブレードと同じ それ以上に高密度なエネルギー。放たれた一閃はDブレードを破壊するに留らず、ダイナモのボディを一文字に切り裂く。

「ちつー！」

ダイナモは即座にバックステップで距離を取り、新たにDブレードを取り出し持ち直す。

敵が離脱したにもかかわらず、エックスは更に間合いの外からブレードを突き出す。すると、刺突に伴いエネルギー状の剣は伸張し、逃げるダイナモの肩口を貫いた。

「ぐわつー！」

握力のなくなつた左手からDブレードが零れ落ちる。

痛む片腕を抑えつつ、後方に大きく跳躍して今度こそ安全圏へ逃れる。

「やれやれ、今のマジだつたでしょ？ ボウヤが相手だと遊ぶのも命がけだね～」

初撃とはまったく異なる一撃。貫かれたのは肩ですが、直前で避けなければ腹に風穴が開いていた。

自分を見据える目。

先の動乱で対峙した時と同じ、迷いのない真っ直ぐな瞳。どうやら完全に吹つ切れたようだ。

「まあ、だからこそオモシロイんだけど……でも死ぬのは嫌だし、  
今回はここで逃げさせてもうつかな」

本調子に戻るのは大いに結構。しかし、いかんせんこちらが消耗  
しきぎでいる。

片腕の制御を失い、ロブレードも半分以上を消費した。アースゲ  
イザーのエネルギーは残しているが、エックスの強化を考慮すると  
心もとない。

敵に習って、こちらもパワーアップする必要がある。

幸いそのための道具は手に入れた。この場合は逃げるが勝ちだろ？  
「ああ、また遊びに来るから寂しがらないでいいよ。今度はちゃんと  
準備するから楽しみにね」

「ダイナモ……いつたい、何がしたいんだ。なぜわざわざ首を突つ  
込んでくるー？」

「ぼくに目的なんかないよ。楽しければ……いや、とりあえずは生  
き延びることかなあ。あくまで命あつての賜物だからね」

そのまま立ち去ろうと背を向けた直後、思い出したかのようにHIT  
ツクスへと振り返り、

「だから、キミも精々死なないようこね  
みてこんみたこね」

「お前つーー！」

「シーコーアゲイン」

最後まで余裕を崩すことなく、ダイナモは空間転移で消える。

あまり遠くまでは移動できなはずだが、あの男の逃げ足の速さは田を見張るものがある。少なくとも自分が追いつくのはほぼ不可能だろう。

どのみち、ダイナモを捕らえたところで事件の解決には役立つまい。また邪魔をするようなら再度打ち倒すまでだ。

「……もう、行かない」

それきりダイナモのことは忘却し、今一度シェルダンへと向き直る。

道中のナイトメアは全てダイナモに破壊された後だった。その遺骸からナイトメアの核を引き抜く必要もないだろう。

もうこの場所に用はない。

また、新たな戦場に向かわねばならない。

また、新たな敵を葬らなければならない。

けれど、その足取りが、バスターの重みが、ほんの少し軽くなつた気がした。

『救われた』

その一言に救われた。

彼は自分に救われたと言つたが、やはり真に救われたのは自分の方なのだ。

「…………ありがとう」

エックスは再び歩きはじめる。

十を超える仲間を失い、百を超える敵を葬り、千を超える部外者を犠牲にして

「俺は、守るよ」

万を超える人々を救うのだ。

#6 GUARDIAN(守護者)(後書き)

「リジーナに続いてヒートークス、シェルダンもやられたか」

「これで蘇生させた手駒の半分以上を失った。

残りは3体。いずれも高性能のレプリロイドだが、最も戦闘に長けたヒートークスがやられた以上、残りの連中に勝ちは期待できないだろう。

まとめてぶつければ善戦できるかもしないが、プライドの高いヴォルファングや、騙して利用しているヤンマークが素直に従うとは思えない。

それでも、今まで通り各拠点に待機させてナイトメアを撒いておけば、時間稼ぎの役割くらいは果たすだろ？

「イレギュラーハンター・エックス……どうやら侮りすぎていたようだな」

ゲイトとて馬鹿ではない。たとえ感情に駆られ憤慨しても、そのまま戦局を見失う真似はしない。

持ち駒の大半を失い、計画に大幅な狂いが生じたことは、彼に今一度冷静な思考を取り戻させていた。

母体の完成まであとわずかだが、今のうちに『保険』の設計に着手しておきたい。それにダイナモと名乗った傭兵も、捨て台詞を考慮すれば再び邪魔に入る可能性が高い。

もはや生け捕りに固執している場合ではない。敵が更なる力を身につける前に、すぐにでも始末することが望ましい。

これまでに採取したデータでは、エックスは極めて高い戦闘能力を誇る。それも未だ成長を続けており、その到達点はまるで未知数だ。

にもかかわらず、敵であるタートロイドを殺すことをえ躊躇い、ヒートニックスを始末した際には半狂乱にまで陥った。プログラムの方はあまりに脆く、不完全といわざるを得ない。

ならば、その纖細な心に搖さぶりをかけることで、いくらでも付け入る隙は作れるだろ？

「アイゾック、すぐにアレを向かわせろ。ヒックスにぶつけろ」

『承知いたしました』

ゲイトは貸し『えた施設に籠もつて居るアイゾックに通信を送る。さらに、傍らに待機していたハイマックスにも命令する。

「ハイマックス、戦闘の隙を突いてエックスを殺せ。残骸の回収も命じるが　原型を留める必要はない」

「仰せのままに」

その場を後にするハイマックスを見送りつつ、ゲイトは忍び笑いを零す。

「それにしても、奴を作った輩は詰めを誤つたな。あれほどの怪物を生み出しておきながら、よりもよつて感情を附加せるとは」

イレギュラーハンター　　レプリフォースが瓦解した今となつては、まともに機能している数少ないイレギュラー討伐組織。その重要性は語るまでもなく、国の役人や政治団体以上に、世界に欠かせない存在といつても過言ではない。

ともすれば崇高な存在に聞こえがちだが、その実態はただの汚れ役だ。

人間の手に負えなくなつたレプリロイドを、イレギュラーの烙印を押して始末する。そこに彼らの意思は存在せず、ただ人間の定めた法を遵守し、毎日のようにイレギュラーを殺す。

人間の価値観に従い、人間の思想に洗脳され、命じられるままに同族殺しに明け暮れる傀儡。それが世界の平和を守り続ける、正義の味方の正体なのだ。

ゲイトはそのことを非難するつもりはない。だが、ひどく愚かしいと思う。

「従順な下僕を欲するのなら、はじめからそうプログラムを組み立てればいいものを……」

エックスはハイマックスに勝てない。勝てるはずがない。イレギュラーの討伐すら躊躇するエックスでは。己の任務すら満足に遂行できないエックスでは。自身の感情すら制御できず、あまつさえ束縛される軟弱者では、冷酷非道の殺人機械は倒せない。

「道具に感情など必要ない。まして『涙』など弱者の象徴。まったく、つくづく理解し難いよ」

その言葉と自身の行動が矛盾していること、ゲイトはもう気づけない。

ハンターベースに帰還する前に、エックスは再びマグマエリアに足を運んでいた。

相変わらずレプリロイドの気配は感じられない。違いがあるとすれば、こちらの来訪をしつこく出迎えた円環の消失くらいだろうか。がらんどうの空間を進むと、田舎の場所には思いのほか容易に到着できた。

「……あつた！」

投げ捨てたはずのセイバーは、依然としてその場に転がっていた。そして、激昂に駆られて破壊しつぶしたヒートニックスの残骸も。

(テメーの向かうこの先は果て無き闘争、終わりのない無限地獄よ)

苦悩の果てに、少しでも希望があるのなら。  
犠牲の対価に、少しでも救いがあるのなら。

この身が灼熱の業火に炙られようと。  
この身が亡者の怨念に呪われようと。

「それで誰かを救えるのなら、喜んで地獄に行つてやるぞ」

もう、手放さない。

もう、逃げ出さない。

決意を胸にセイバーを拾つ。

血塗られた凶器を握り締める。

「お前にそれを手にする資格があるのか？」

その行動を諫めるよう。  
その決意を戒めるよう。

「俺を殺したお前に、俺の武器を扱う資格があるのか？」

空間に響き渡る怨嗟の声。  
背後から感じる憎悪の念。

「俺の屍の先に栄光を掴んだお前に、俺の力を受け継ぐ資格があるのか？」

聞き覚えのある声。

聞き違えようのない声。

聞くことを願い続けていた声。

殺意に汚染されたそれは呪詛のよじてエックスの心を蝕んでいく。

「なあ……エックス」

ゼロ 紛うことなきパートナーがそこにいた。  
両の瞳に殺氣を漲らせて。  
その身を憎悪で染めあげて。  
紫の瘴気を纏い佇んでいた。

「何だその顔は？　久し振りの再会なんだ。もつと喜べばどうだ」

「ゼロ、なのか……」

驚きはしなかつた。  
ターテロイドが葬られた時点で予感はあった。  
喜ぶことはできなかつた。  
親友の変わり果てた姿がそれを許さなかつた。  
ウイルスに侵された時と同等、あるいはそれ以上の邪惡な波動。  
感動の再開に咽泣くには、田の前の存在はあまりに禍々しそうだった。

「それ以外の何だと……いや、確かに俺はお前の知るゼロではない

当然だ。

ゼロはもう死んだのだ。

ゼロはこの手で殺めたのだ。

ならば、この田に映る存在はなんだ。夢か、幻か、あるいは

「あの時、俺は……ゼロはお前の手で殺された。すべてはそれで終わったかに思えたが、ゼロの中にはまだ残っていたんだよ。お前への『憎しみ』がな！」

「ゼロが、俺を憎んでいた

」

「そうだ。それはプログラムが停止してなお途絶える」とはなかつた。行き場をなくした憎悪の念は現世うつよからの開放を望み蘇らせたのだ

「俺を

ゼロであつてゼロでないもの。

ゼロの憎しみが具象化したもの。

ゼロの怨念の集合体は、その存在を敵にぶつけるように

怨恨 「俺はゼロの『亡靈』だ！ ゼロのお前へ向けた嫉妬、憤怒、殺意、あらゆる負の感情が俺を生み出したのだ！」

それは本来ならばありえないことだった。

レプリロイドはプログラムの停止に伴い、須らくその機能を喪失する定め。記憶データを継承することはもちろん、外的な作用をなくしての蘇生など不可能だ。

死んだ人間が生き返らないのと同じ。それは決して覆せない絶対的な法則だ。

「そんな……それじゃあ、まるで

」

だが、何事にも例外は存在する。  
いかなる法則にも特異点は存在する。  
その存在を、ヒックス自身が知っている。

## 「シグマと同じ」

人類への悪意。

エックスへの憎悪。

世界征服への執念。

誰の手を借りることもなく、負の感情を糧に幾度も復活を果たした存在。

「シグマ、か。あんな死に損ないと同列視されるのは不服だが……」

そのようなものか

亡靈が背に携帯していたセイバーを抜き放つ。数多の敵を屠ったそれは、怨念に塗れて紫に染まっている。

魔剣が解き放たれた刹那、その身を包む瘴気が倍増する。膨れ上がる殺意に呼応するように、総身を邪悪に彩っていく。

「俺はお前を殺し、今度こそ開放される。俺たちの 貴様とゼロの悪しき因縁からな！！」

弾丸の如き速度で突進する紫の亡靈。

怨嗟の込められたセイバーの一太刀を、エックスは自身のセイバーで受ける。

凶器に込められた狂氣は圧力と化して、エックスに重く押し掛かる。

「思えば、お前はいつも俺の先を進んでいた

一撃、三撃 憎悪と共に激しさを増す攻撃。

防戦一方のエックスを、亡靈は呵責なく攻め立てる。責めて、責めて、責めづづける。

紡がれる言葉が、叩きつけられる重圧が、そのすべてがエックスを侵していく。

「お前を見るたび、いつも俺は己の不完全さを認識させられた」

自分の腕の中で息絶える間際、ゼロは確かに自我を取り戻した。生死の狭間に ウィルスの汚染から、狂氣の渦から脱出したのだ。両者を縛る悲運から解放され、最後は分かり合えたと思っていた。たとえ今生の別れとあっても、その絆は失われないと信じていた。

「なぜお前だけが選ばれた……なぜお前だけが光を手にする……！」

その幻想を打ち碎くように、際限なく叩きつけられる怒号と剣撃。彼は憎んでいたのだろうか。彼は恨んでいたのだろうか。あの結末を。あの別れを。あの決着を嘆いて呪つたのだろうか。

「英雄として称えられ、選ばれた者の証である『涙』を持つ貴様には分かるまい」

膝から力が抜け落ち、検査に耐えかね吹き飛ばされる。  
地べたに叩き伏せられたエックスを追いかけ、亡靈が拳を振り上げる。

怒り、憎しみ、嘆き、悔やみ ふらつきながら立ち上がる標的に、そのすべてを叩き込む。

「IJの俺の絶望が……最後まで涙を流せなかつた、俺の気持ちがな  
……」「

亡靈は手ごたえを感じていた。  
顔面に突き刺された鉄拳は、エックスの心を身体もろとも碎いた  
はずだ。

それなのに、エックスは倒れない。

頬に拳を押し当てられながらも、エックスは動かない。  
握り締めたセイバーも手放さず、直立不動を保つていて。  
倒れない。

絶望しない。

それどころか その瞳に光が宿る。

「 違つ。お前は、ゼロじゃない」

いきなり様変わりしたエックスの剣幕に気圧され、亡靈がたじろ  
ぎ後ずれる。

だが、動搖を見せたのもほんの一瞬。即座に余裕を取り戻し、歪  
んだ口元から呪いの言葉を吐く。

「自責から逃れるための現実逃避か？ 隨分と悪知恵が働くじゃないな  
いか」

「黙れ！ もうお前には惑わされない。偽者め、絶対に許さないぞ

「……」

そこで亡靈は アイゾックにより造られたゼロの模造品は、ようやく自身の失態を悟る。

どこでボロが出たのかは分からぬ。だが、先の一言が引き金だつたことは明白だ。口は災いの元、下らぬお喋りに昂じたのは迂闊だったのかもしれない。

しかし、遅かれ早かれ偽りの仮面は剥がされ、その正体は白田の下に晒されていただろう。なにしろ、敵はエックスの内情など知らぬ身分。大根役者が脚本すら手渡されず指名を受けたところで、舞台を演じきれるはずがない。欺き通すこと自体に無理があつたのだ。

「ハ、ハハハハハ

」

だが、模造品には何ら不都合はなかつた。

もとより試作品として作成されたプログラムには、高度な頭脳など搭載されていない。ただアイゾックに従い、レプリロイドを殺すことだけがその全てだつた。

そんな短絡思考の模造品にとつて、出来損ないの思考回路を駆使してまで茶番を演じることは、自身のプログラムに大きな負担をかけていた。その命令が効を成さなくなつた今、プログラムは本来の性能を十全に發揮する。

ロボット破壊プログラム 獣性と残虐性のすべてを解き放つた敵は、血に飢えた狂犬の瞳をエックスに向ける。

開戦の合図といわんばかりに、敵のバスターから一発のショットが放たれる。それは迫り来るに連れ分裂を繰り返し、単発から弾膜へとその規模を変える。

無数の光弾は瞬く間に視界を覆い尽くし、搔い潜る隙間は伺えない。全力でショットを連射して、複数相殺することで強引に突破口を開く。

弾膜の壁を突破した先には、待ち構えていたようにこちらへ肉薄する敵の姿。

振るわれるセイバーの一閃を、こちらもセイバーで受け止める。重すぎる一撃。片手同士の迫り合いだが、相手に分があるのは明白だ。右手のバスターをアームに戻して、即座に両手で柄を握る。それでもなお、力比べは敵に軍杯が上がった。

セイバーを弾かれ、頭部に裏拳を叩きこまれる。こちらの意識が遠のいたわずかな隙に、相手は右手をバスターに変形させ、エネルギーを溜め込み大地へ叩きつける。

「オワリダ」

足元の地盤が炸裂し、無数のエネルギー弾が放出される。

かつての死闘で味わつたものと寸分違わぬ技、真・滅閃光。放たれた一撃はエックスを吹き飛ばし、周囲の地面を陥没させる。

「くそつ！」

ダメージは食らつたが、飛ばされた勢いを利用することで、敵か

ら数メートルの距離を取る。

接近戦では勝ち目が薄い。かといって、闇雲にショットを連射しても初撃の弾膜で防がれるだろ？。とにかく、十分なエネルギーをチャージ出来るだけの時間が必要だ。

敵との間合いを慎重に測りつつ、その拳動を警戒する。ダッシュで近づいてくるか、あるいはバスターで攻めてくるか

「ニゲルナヨ」

相手の姿が霞むようにして消失する。

次いで自身を襲う激痛。気付けば敵に後ろを取られ、背中を大きく切られていた。

明らかに目で追いかれない、無音の超高速移動。

空間転移　　物理法則を超えた絶技は数十メートルの距離をも零と化す。

これでは遠距戦に持ち込めない。

振り返りざまにセイバーで斬り付けるが、相手はいつもたやすく受け止める。

やはり圧倒的に部が悪い。

反撃の間を与えないように、我武者羅でセイバーを振るい続ける。だが、敵にすれば木々を手にした子供の遊戯にも等しいのだろう。悉くが紙一重でかわされ、数秒と立たずに斬り返される。

こちらの苦し紛れとはかけ離れた、無駄のない洗練された斬撃。それはエックスの連撃の間を縫うようにして、その胴体に深い傷を残す。

「ぐあ……」

手からセイバーが零れそうになるが、歯を食いしばり握り直す。

もう、手放さないと決めたのだ。

もう、逃げ出さないと決めたのだ。

渾身の力で一撃を放つが、やはり片手で防がれる。

嘲笑う亡靈。

ゼロを装つ悪しき存在。

ゼロを名乗る偽りの存在。

負けられない。

負けるわけにはいかない。

「はあああああ！」

拮抗するセイバーの間で火花が散る。  
相手はセイバーを両手で握り直して、凄まじい力で押し返していく。

両腕が痺れる。

握力が弱まる。

体が痙攣する。

だが、退くわけにはいかない。

絶対に、負けるわけにはいかない。

「あああああああああ！」

「……チイ」

そこで初めて、敵のから余裕の笑みが消える。

相手は自ら剣圧を緩め、わざと弾れることで2、3歩後ろに下がる。そのまま立て続けに2連続でバスターを放ち、さらに間をおかずセイバーから斬撃を飛ばす。

至近距離で放たれたバスターはエッカスを直撃し、そのまま数メートルほど後退させる。最後の斬撃はかるりうじてセイバーで相殺するが、敵に先手を許してしまう。

エックスが体勢を立て直すより速く、相手は攻撃の予備動作を終える。

その手に掲げられたセイバーが、天井に届かんとするほど伸張している。膨大なエネルギーを注ぎ込むことで、セイバーの出力を限界まで底上げしているのだ。

敵は数メートルまで膨張した凶刃を、両の手で力任せに振り下ろす。

「シネ

」

ターテロイドを葬つた破滅の刃 幻夢零。

相殺は不可能。

防御はその意味を成さない。

回避は明らかに間に合わない。

大地に巨大な亀裂が生じる。

天井に破壊の爪痕が刻まれる。

岩壁が衝撃の余波で粉碎される。

閃光の速さで放たれた斬撃はエックスもろとも、辺り一体を容赦なく吹き飛ばす。

立ち込める土煙の先には、無残に碎け散った敵の姿が横たわっているはず

「やつぱり、お前はゼロじゃない」

だが、エックスは立っていた。

その全身を覆うように、突き出された手からエネルギー障壁が張られている。

ショルダンに手渡された最強の盾。それは必殺の一撃からエックスを見事に生還させていた。

「ゼロの攻撃はこんなに軽くない！』

重さ、速さ、鋭さ。

どれをとっても、ゼロの攻撃に遠く及ばない。

先の一撃がゼロのものであれば、防ぐことなどかなわないはずだ。

「お前にゼロを名乗る資格はない！..」

咆哮を上げて突進する。

激情に駆られたのか、あえて白兵戦を挑むエックスを内心嘲笑いつつ、敵はセイバーで迎え撃つ。

エックスは繰り出された一撃を正面から受け止めることなく、セイバーで逸らして受け流す。そして右手のバスターからブレードを展開させる。

「……ツ！？」

左手に友の形見を。  
右手に最強の矛を。

二刀流 相手はブレードの薙ぎ払いをかわしたが、連続して放たれるセイバーを防げない。  
ついにエックスの攻撃が敵を捕らえる。

それは装甲を浅く傷つけるだけに終わつたが、面食らつた敵は思わず体を強張らせる。

すかさずブレードとセイバーを交差させてみつにして斬り付ける。今度こそエックスの斬撃は深々と胴体を抉り、腹部に十字傷を刻む。

「ウウウウア！…」

敵はたまらず後ずさりエックスから距離をとる。

それは致命的な失策だった。

顔を上げた先には、輝くバスターで自分を狙うエックスの姿。既に右手からブレードは消失しており、変わりに最大限までエネルギーが蓄積されている。

すかさず転移で逃げようとするが、それを見逃すエックスではない。

敵が姿を眩ますより速く、チャージしたエネルギーを解き放つ。

「消えろ！ 偽者め！…」

光が奔る。

憎悪が、殺意が、怨念が光に包まれていく。紫の亡靈が、閃光の灼熱に浄化されていく。放されたエネルギーの束はその全てを焼き尽くし、DNAの欠片すら残さず消滅させる。

敵の焼失に伴い、立ち込めていた瘴気も霧散する。

「終わったか……」

戦いを終えてなお、エックスには拭い去れない疑惑が残つた。先ほどの敵はゼロではない。だが、偽者と切つて捨て去るには、オリジナルに似すぎていた。

それは外見や様相の問題ではない。むしろ、そのプログラムが垣間見せた衝動こそが、どこまでもゼロを髣髴させた。

敵が本性を現すと同時に、解き放たれた途方もない殺氣。そして尋常ならざる怪力と凶暴性。用いた技もさることながら、なによりその獰猛さと 狂気。

血眼に殺意を漲らせ猛攻する野獣は、かつてのゼロとあまりに酷似していた。

彼が『真の姿』と断言してみせた、あの時の狂った親友と

「 違う！ そんなはずはない。ゼロは、ここにいるんだ」

脳裏をよぎった悪夢を払拭するように、セイバーをきつく握り締める。

その感触を確かめるよう。

そのぬくもりを手放さぬよう。

一度と『亡靈』などという幻覚に惑わされないよう。

心に新たな誓いを刻み、エックスは今度こそ立ち去りつゝ踵きびすを返

し

「デスボール」

自身を襲つた衝撃に吹き飛ばされた。

## #7 PHANTOM (幻影) (後書き)

O 「思つたほど動じてなかつたな」  
X 「先輩との勝負はX5で既に決着してますか?」  
O 「本編でも一旦で偽者と見破つてたしな」  
X 「そんなもんですよ。先輩との確執はX5でお終いです」  
O 「ところで、どうしてアレが偽者と分かつた?」  
X 「作者がX5を書く場合のネタバレになるのでまだ言えません。書く予定は未定ですが」

アイゾック「アレとかコレとかボケが始まってるんじゃないのか?」

ゲイ「(#^\_<)ピキピキ」

## #8 UONFUSHON (困惑)

確かに殺したはずだった。

これまでの戦闘データから分析した敵の防御力の理論値を考慮すれば、先のデスボールは葬り去るのに十二分な威力を誇っていた。それも、相手が警戒を解いたタイミングを見計らって放ったのだ。現に、ターゲットは直撃の瞬間まで不意打ちに気づきもせず、防御する間もなく吹き飛ばされた。

コンピューターの算出結果によれば、その死亡率は99・98%。偶然や幸運で生き延びられる数値ではない。エックスの死は絶対のはずだ。

それなのに、

「お、前は……あの……とき

」

なぜ死ない。

なぜ起き上がる。

なぜ意識を保っている。

なぜこちらを認識できている。

しかも記憶が残っている。メモリが破損していない証拠だ。

加えて身体は五体満足。原形を失うどころか、四肢の損失すら伺えない。

「お前を倒せば……悲劇は……お、わる……」

エックスはよろめきながらバスターを構え、申し訳程度の攻撃を繰り出している。威力も伴わず照準すら定まっていない砲撃。それも数発でエネルギーが尽きたのか、再び息を荒げて膝をつく。どうやら敵は奇跡的に0・02%の生存を引き当てたようだ。い

や、そうに違いない。

データによる分析は確実だ。それ以外では敵の生存に説明がつかない。

ならば話は簡単だ。

確実に息の根を止められるだけの攻撃を繰り出せばいい。

先の攻防から敵の耐久性を求めなおし、その損傷ダメージも加味する。ゲイトにより搭載されたプログラムは、数秒とたたずみ必殺の一手法を導き出す。

計算には寸分の狂いもない。100%の確率で始末できる。  
今度こそ、殺す。

ハイマックスの攻撃は命こそ奪えなかつたが、エックスに瀕死の重傷を負わせていた。

アーマーの装甲は碎け散り、至る箇所でスパークが発生している。内部損傷も激しいのか目が霞み、ノイズが絶え間なく鳴り響く。

立っているだけで全身が悲鳴を上げ、痙攣は一向に治まる気配を見せない。左手の感覚は完全に麻痺し、手放さないと誓つたばかりのセイバーも消えていた。

ダイナモと対峙した時の比ではない。今のエックスは半死人も同

然の有様だつた。

「お、前は……あの……とき　」

狭まつた視界が敵を捉えると共に、瞼に覆われた瞳が怒りに燃える。

靄がかかつたように輪郭しか捉えられないが、黒一色のボディが敵の正体を如実に物語つていた。

スカラビッチを殺した漆黒のレプリロイド。全ての元凶が目の前にいる。諸悪の根源が目の前にいる。

「お前を倒せば……悲劇は……お、わる……」

片足を引きずるように前進し、震えるバスターをハイマックスに向ける。

バスターの機能が残されていたのは奇跡だったが、思うように力を込められない。そこに集約されたエネルギーは平常時の10分の一にも満たなかつた。

決死の覚悟で放つた一撃は的外れな方向へと向かい、岩壁をわずかに焦がすだけで終わる。

負けじと二発目を放つ。

一段と弱々しさを増した攻撃はハイマックスに届きずらせず、空中で自然消滅する。

「お前を……た、お……せば……」

その次は発動しなかつた。バスターは螢のよつと点滅を繰り返すばかりで、本来の輝きは片鱗すら伺えない。

それを好機と捉えたのか、ハイマックスが攻撃に移る。巨体から

は連想できないスピードでエックスに迫り、速度を上乗せした拳を猛然と突き出す。

鋼鉄の拳はその顔面を真正面から捉え、数十メートル近くも吹き飛ばす。

エックスの体は勢いに飲まれ、地面に叩きつけられては跳ね上がり、バウンドが6回に達したところで壁に激突する。痛覚機能も失われたのか全身を蝕み続けていた激痛が和らいでいく。

「や、た……こ……れ、で……」

これでまだ戦える。

だが、そこで気づいてしまう。

痛覚だけでなく、全身の感覚を認識できない。どうやら神経回路が断絶されたようだ。立ち上がる」とはもうちろん、その場で転がることすらできない。

絶体絶命の窮地に陥ったエックスだが、ハイマックスは追い討ちをかけようともせず呆然とした様子で何やら眩いでいる。

「バカな……確かに100% ありえない

ノイズに邪魔されて聞き取れなかつたが、どうやら敵はうつたえているようだ。これが最後のチャンスだらう。

(お願いだ、動いてくれ……)

一発だけでいい。  
相打ちでもいい。

二度と動けなくなつてもいい。  
ここで壊れてしまつてもいい。

そんな必死の願いもむなしく、彼の体は地べたに横たわり続ける。

エックスがあがくその間に、ハイマックスは混乱から立ち直った。

「デスボール」

半死半生の標的を今度こそ仕留めるべく、ハイマックスは胸元で両手を構える。

その間に生じた光球は徐々に成長し、直径30センチほどの大きさになる。敵が攻撃の予備動作を終えるまでが彼に残された最後の時間だった。

(死ぬ　　このままじゃ、死んじまう　　)

光球の巨大化は留まるることを知らず、ハイマックスの体躯と同等にまで膨張する。

圧縮されてなお桁外れの大きさを誇る、計り知れないエネルギー。束ねられた破滅の光は、ついにエックスに向けて解き放たれる。

(いやだ……俺は、しね　　な　　)

迫り来る死を前にしてなお、エックスは動けない。

光球が直撃するより早く、ブラックアウトが訪れる。

死に瀕したことによる、すべて認識機能の喪失。死への恐怖を和らげるそれは、命を奪われる者への最後の慈悲だろう。

破壊の衝撃を、自身の死を感じることもなく、エックスの意識はそこで途切れた。

「うおおあつーーー。」

掛け声と共に光球が両断される。

高出力の破壊兵器 エックスの手から跳ね飛ばされたセイバーは、膨大な圧縮エネルギーを一刀のもと切り捨てる。

その斬撃はエックスの手により振るわれたものではない。エックスは意識を手放し地に伏している。

それは突如として戦場に舞い込んだ第三者、赤いレプリロイドによるものだった。

「バカな。なぜオマエがここにいる」

ハイマックスは面識こそなかつたが、その姿には見覚えがあつた。他ならぬ自分のオリジナル。

エックスと肩を並べる実力者として、その名を馳せたレプリロイド。

今はなき第0特殊部隊を率いていた、特A級のイレギュラーハンター。

「オマエは既に死亡」を認識している。なぜ生きている  
ゼロ「口ゼ

ハイマックスの問いかけに答える素振りを見せず、赤いレプリコイド　ゼロはエックスの元へと駆け寄る。

まだ生きてはいるようだが、既に意識はなく虫の息。すぐにでもメンテナンスが必要な、危険極まりない状態だ。

ゼロはそのままエックスを抱えあげようと手を伸ばすが、背後から殺氣で鬱陶しそうに振り返る。

浮遊していたハイマックスは地上に降り立ちゼロを見据える。

「用なしが今更なぜ現れた。ジャマをするな」

「それは俺のセリフだデカブツ。見逃してやるから大人しく帰れ。」

もちろん帰れといわれて素直に帰る相手ではない。

予想だにしなかったイレギュラーの存在に、ハイマックスは露骨な敵意を向ける。

殺氣を込めた瞳でゼロを睨み付け、自身の両手を大きく広げる。

「田障りな奴め。オマエはもう用済みだ、ここで消す

連なつた円環状の紋章がその周囲に展開され、ハイマックスを軸に回転をはじめる。

「それも、俺のセリフだ。これ以上俺たちに纏わり付くなら斬る

相手の気迫に物怖じすることなく、ゼロは片手でセイバーを構える。それと同時に、ハイマックスは低空飛行の姿勢を保って襲い掛かる。

先の光球からして敵は遠距離戦に特化していると思ったが、どうやら遠近共に抜かりないようだ。

だが、接近戦はこちらも望むところ。自信過剰なのか、それともカウンターを意識していないのか、相手はバカ正直に突撃してくる。敵の接近にあわせて、ギリギリのタイミングでセイバーを顔面へと突き出す。

刹那のタイミングで放たれた一撃。認識してから避けるのでは間に合わない。ゼロの繰り出した突きは確実にハイマックスの脳天を貫通するはずだった。

だが、敵は首を傾けるだけで必殺の一撃を容易に凌ぐ。

「なんだとつ！？」

驚愕すると同時に、ハイマックスの拳が胴体にめり込む。

巨体に見合つ破壊力を秘めた攻撃。エックスを数十メートルも吹き飛ばした一撃をまともに食らい、それでもゼロは不動を保つていた。

歯を食いしばり、腹部に力を蓄え、両足が踏みしめた地面には亀裂が走る。

「ぬつ　おおおおおおーー！」

そのままセイバーを真横に振るう。

ハイマックスの巨躯では接近した状態からかわすのは不可能だ。今度こそ敵を捉えたセイバーだが、その体を覆っていた円環に触れる同時に消滅する。

一度田の驚愕、そして二一度田の隙。

すかさず顔面へ迫り来る拳。とっさに両腕を交差させてガードをすると、いきなり顎を衝撃が襲つた。まるで予期せぬ方向からの攻撃にゼロの体は宙を舞う。

先のストレートはフェイント。次いで繰り出されたハイマックスのアッパーが、ガードを潜つて顎を打ち抜いたのだ。

（こいつ……俺の動きを読んでやがるー？）

「無駄だ、ゼロ。オマエはワタシに勝てない」

異常な先読みと洞察力、加えてその身を守る障壁はエネルギー状の攻撃を無効化するようだ。ここにきてようやく敵があえて接近戦を挑んだ理由を悟る。

セイバーの攻撃は通じない。かといって、純粹な殴り合いで勝ちを拾えるとは到底思えない。

圧倒的にこちらが不利だが、勝機はある。

敵は無力化できるはずのセイバーの突きをあえてかわした。円環の防御が万能でない証拠だ。上から、もしくは下からの攻撃にまでは効力が及ばないのだろう。

ゼロは立ち上がり両手でセイバーを握り正面に構える。

自ら仕掛けたところで、こちらの拳動はほぼ見切られている。ならばわずかな隙を突く、あるいは相打ちを覚悟で放つしかない。

敵の拳は確かに痛いが耐えられぬほどの威力ではない。肉を切らせて骨を絶つ、一撃を代償に息の根を止める。

「どうした、俺に勝ち田はないんだろ？ ならジビツでないでかかって来いよ。その『テカイ図体』は飾りか？」

「……消える、オリジナル」

挑発を受けてハイマックスが動く。

ゼロは敵の沸点の低さに笑みを浮かべ、即座にそれが過ちと気づく。

敵はこちらを見向きもせず、いきなり真横へ 倒れているエックスへと向かう。

「な  
」

ゼロにとつて、ハイマックスは打ち倒すべき敵。だが、ハイマックスにはゼロの存在など邪魔以外の何者でもない。

そもそもハイマックスの任務はエックスの始末。死亡したはずのゼロの登場は単なる障害に過ぎない。ならば、まともに取り合う理由もない。

己の迂闊さを呪うのも後回しに、ゼロは全力でエックスの方へと駆ける。しかし、ハイマックスは絶望的な加速で突き進み、すぐそこにまで近づいている。

掲げられた拳が振り下ろされる刹那、両足に渾身の力を込めて跳躍。エックスに覆いかぶさるようにして倒れ込む。

直後、後頭部に思い切り鉄拳を叩きつけられる。メットは粉々に粉碎され束ねていた髪が解ける。

「ぐつ……汚い真似してくれるぜ。そんなに俺と闘り合うのが怖い

か?「

拳の衝撃はメットを破壊するだけに留まらず、装甲を貫通する」とで内部のプログラムに深刻なダメージをもたらしたはず。それでも、ゼロは立ち上がる。ストレートの金髪を風になびかせ、両目により一層の闘気を漲らせている。

そこでハイマックスの声色に僅かな、微かだが否定しきれない困惑が浮かぶ。

「なぜだ……」

自分が先手を取った。

自分の方がより高速で動いた。

自分が標的の近くに位置していた。

それなのに、直前でゼロが間に割つて入ってきた。自分を追い越してエックスを庇つたのだ。

これで、確実にエックスを始末できたはずの機会を3度逃した。敵は物理法則を、プログラムの解析を凌駕するとでもいうのだろうか。

ありえない。

ありえるはずがない。

自身に搭載されたプログラムはゲイトが手がけたもの。天才が自ら生み出した至高の作品なのだ。

エックスやゼロのような低スペックのオールドロボットが上回ることなど絶対にありえないのだ。

ハイマックスに感情は搭載されていない。それゆえ焦りや動搖も感じないはずだった。

しかし、己の理解を、プログラムを超えた『ありえない』はずの超常現象を何度も目の当たりにして、彼はかつてない困惑に見舞われていた。

「ワタシに勝るはずが……数値的な戦力は確実に上だ。オマエたちは……」

「数字にこだわるから分からんんだぜ。お前の軽いパンチじゃ俺たちの身も、心も、魂も砕けは砕けはしないぜ！」

完膚なきまでに痛めつけても、何事もなかつたように立ち上がる敵。

いかにダメージを負わせても、微塵も揺らぐことのない不屈の闘志。

ハイマックスの脳裏で警鐘が鳴り響く。

目の前の存在は異常だ。

目の前の存在は理解できない。

目の前の存在は得体が知れない。

殺さねばならない。

消さねばならない。

敵は常識から、理論から、データから、プログラムの枠組みから外れた存在だ。

こんなモノが在つてはならない。

ハイマックスは空中へ浮かび上がり自らを保護する円環を解除する。

ゼロを、目の前のイレギュラーを確實に抹消するため守りを捨てて攻撃に移る。

「デスボール、デスボール、デスボール……」

両手の間に光球が生まれ拡大と同時に分裂する。

2つ、4つ、8つ

光球は増殖を繰り返し、そのすべてがゼ

ロへ襲い掛かる。

凌げるはずがない。

かわせるはずがない。

プログラムではそう理解しつつも、ハイマックスは攻撃の手を緩めるどころか苛烈さを増す。

「デスボールデスボールデスボールデスボールデスボ  
ル　　」

数えるのも鬱屈な光の弾幕。

出しうる限りのエネルギーを込めた、自身の最大最強の攻撃。確実に敵を葬り去るはずの猛攻を、死を免れぬ絶望を、ゼロは、防ぎ、避け、かわし、切り裂く。

降り注ぐ雨粒の一滴も浴びないよう、弾幕の雨を掻い潜る。わずかばかりの無駄もない、微塵の隙も伺えない動き。

荒れ狂う光球の群れを歯牙にもかけず、確実に距離をつめてくる。

「バカな……ありえない

」

障壁を解除せず肉弾戦で翻るよう攻め続ければ、勝利したはずの戦いだった。ハイマックスは自らの優位を、自らの手で崩したのだ。

プログラムの解析に絶対の信頼を置き、自身の勝利を確信した。それゆえ、わずかに戦況が揺らいだ程度で暴走した。

感情を持ち合わせずプログラムに依存するしか脳のないハイマックスは、不測の事態を処理する術を知りえなかつた。

「ありえない！　！」

ゼロの振るつたセイバーで片腕が斬り飛ばされる。

勝負の決め手となる一撃だった。ハイマックスの損傷は致命的な

ものではなかつたが、ゼロの一撃は戦おうとこうの意思をも断ち切つていた。

主の命令に絶対忠実のはずの戦闘兵器が、戦いを放棄し自らの意思で退却していく。

ゼロ、そしてエックスとの戦いを通じて、ハイマックスのプログラムには大きな変化が生まれていた。

それは世間一般で言つ成長であり、ゲイトが下らないと一蹴する欠陥だつた。

「どういう事だ……スピード、パワー、ボディ、どれをとっても負けてはいけない」

上空に浮き上がり飛翔する自分を、ゼロは追いかけてこなかつた。追いかける手段を持たなかつたのか、追いかける暇もなかつたのか、あるいは追いかける必要などなかつたのか。

己の直面した不条理に対する答えを求め、ハイマックスはゲイトの元へ 天才の元へ帰還する。

「ヤツらは……『心』とは、何なのだ……」

「アーッハハハッ！」

戦闘の一部始終を監視映像で傍観していたアイゾックは笑いを堪えられなかつた。

「笑わすにはおられんわい！　あのエックスでさえ歯が立たなかつたハイマックスを、倒してしまつとはな」

ゲイトの生み出したハイマックスを前に、エックスはボロ雑巾のよつに敗れ去つた。

だが、ゼロはどうだ。足手まといのエックスを庇い、それでいて致命傷らしいうダメージも受けず、敵を心身ともに破壊しつくした。その圧倒的な戦力差を目の当たりにして、アイゾックは喝采の笑い声を上げる。

「ゼロー、やはつおまえこそが最強のロボットじゃー。」

そして興奮に酔いしれるあまり、室内に入り込んできた存在に気づかなかつた。

「なるほど。どうこうとかと思えば、貴様の仕業だつたか……」

気づけば背後にはゲイトがいた。

赤く光る両の瞳が堪えようのない憎悪と殺意で溢れている。

表情こそ崩れていないが、内心腸が煮えくり返る思いなのだろう。

「ボクのくれてやつた実験データを何に使つたかと思えば、あんな旧世代のガラクタを蘇生させていたとは

アイゾックがゲイトに接近した目的は、もちろん世界再生のためではない。それは、ゲイトの持つ優れたレプリロイド蘇生技術にあつた。

レプリロイドの蘇生は現在でも困難を極め、よほど原型を保つていない限りはほぼ不可能とされる。

仮に同じ機体を作り上げたところで、その中身まで元通りといふわけにはいかない。

レプリロイドのプログラムは擬似的な心である。そこには人格が宿り、それぞれが学習して個を形成することで初めて高度な機能を發揮する。心に代えは、量産は効かない。個々に応じたかけがえのない、唯一無二のプログラム。それがレプリロイド特有の『心』なのだ。

レプリロイドとメカニロイドの最大の違いは、蘇生の可否にあるとさえ言っていた。そんな常識を覆したのが、その当時天才の名を欲しいがままにしていたゲイトだった。

レプリロイドの残骸から、パーツの欠片から、一枚のデータチップから、形は愚か記憶すら保った個体を蘇生させた。

ゲイトが長年かけて培つた技術の結晶こそが、アイゾックの真の

狙いだつた。

それだけのために、破壊されたゼロの破片を手土産にゲイトへ取り入つたのだ。

「あの汚らしい玩具はゼロを隠すための田暗ましだったか。まんまと騙されたよ」

「好き勝手ほざいておれ若造がー、ワシの目的は既に達した！ もはや貴様に用などない」

そして田論見どおり、見事にゼロは復活を遂げた。  
最高のレアリロイドとして。  
最強のイレギュラーとして。

今一度この世に解き放たれたのだ。

達成感に満り声を荒げるアイゾックを、ゲイトは底冷えするような目つきで見下していた。

そして

「そうか。な、もうこの世に未練はないな

ゲイトの動きにアイゾックは反応できなかつた。正確には田で違うこともできなかつた。

あまりにも自然に、そして迅速に放たれた一撃。

戦闘用レプリロイドではないはずのゲイトの腕は、アイゾックの首を根元から引きちぎっていた。

頭部の喪失に伴い、制御を失った体は崩れ落ち唯の鉄屑へと成り下がる。

文字通りゲイトに命を握られた状況で、それでもアイゾックは高笑いを続ける。

「ハハハハハハッ！ ワシを殺したところで手遅れじゃ！ ゼロは必ず貴様を殺す！！」

自身の誇る最高傑作。

最高にして最強、最悪の戦闘用レプリロイド。

一度にわたつて失敗したが、生き続ける限りチャンスは訪れる。いつか必ず、今度こそゼロは奴を破壊するだろう。そしてこの醜い世界を、邪魔なレプリロイドたちを、全てを破壊しつぶして無に帰すのだ。

「貴様だけではない！ 奴も、世界もなにもかもじや！！ ゼロは必ず全てを破壊す 」

アイゾックの言葉はそこで途切れる。

ゲイトがその手に掲げていた首を無造作に握り潰したのだ。砕け散り周囲に飛散する破片を踏み潰し、転がっているアイゾックのボディも蹴り飛ばす。

「面白い。ゼロの解析は終えていたつもりだったが、ビックやらいまだ不完全だつたようだな」

ハイマックスはゼロのDNAから生み出した。

ゆえにゼロの行動パターンは熟知し、あらゆる性能でゼロを上回っていたはずだ。

それが、あえなく敗れ去つた。

おそらくは組み込まれたプログラムを超えた動きに、ハイマックスが付いていけなかつたのだ。ゼロのプログラムを知り尽くしていなかつたが故の敗北といえる。ハイマックス自身も改良する必要があるだろう。

しかし、ゼロの破片の一部では、得られる情報量もたかが知れている。なんとか本体を捕らえて直接解析する必要がある。

その先に待ち構えているであろう新たな境地を思い描き、ゲイトは自己陶酔した笑みを浮かべる。

「お前の最高傑作とやらも、エックスも　　『悪魔』も全てを掌握して、頂点に君臨するのも悪くない」

自身がアイゾックの、そして悪魔の操り人形に過ぎなかつたことを、今の彼は知る由もない。

## #8 UOZUCHUOZ (困惑) (後書き)

「……ん？」今日は後書きが少ないな  
X「9話の後にまとめてするみたいですよ。あと、作者からもお知  
らせがあるみたいですね」

液体に満たされたカプセルの中でエックスは眠るように瞳を閉じている。彼を包むナノマシンは破損したアーマーを着実に修復しつつあるが、エックスが目を覚ます気配はない。

治療溶液が中枢まで浸透するにはある程度の時間を要する。加えて、外装と異なり複雑な構造を誇る内部組織には効き目が薄い。いかに療養中といえども、そのダメージを考慮すれば楽観視はできない。

「ケイン様、エックスの容体は……」

「そう心配そうな顔をするでない。確かに重篤ではあるが、外部装甲に比べればメインプログラムの損傷は微々たるものじゃない！ これなら一週間もあれば完治できるじゃろ？」

エイリアの不安を払拭するため、ケイン博士は断言するよつて答える。

「それもこのアーマーのおかげかの……。以前より防御性能が増しておる」

事実、エックスが死を免れたのはブレードアーマーに依る所が大きかった。

彼が新たに装備していたアーマーは、エイリアがバックアップデータから再生したファルコンアーマーの強度を遥かに上回っていた。その強靭な鎧をなくして存命などありえなかつただろう。

「いったい、何があったのでしょうか。この新しいアーマー……それ

に、あれほどの重傷を負つてくるなんて

エックスが発見されたのは今朝方のこと。

突如として鳴り響いた警報に促され、エイリアが監視モニターの映像を拡大すると、正面ゲートで力尽きたように倒れ込むエックスの姿が飛び込んできた。

直ちに瀕死の彼を医療施設に運び込み、ケイン博士の数時間に及ぶメンテナンスの末、ようやく安泰まで漕ぎ付けたのだ。

「さあの～～～。そればかりはエックスから聞かんことはの～～～。なんにせよ、いじして戻つて来てくれてよかつたわい」

エックスの無事に安堵するあまり、一人は見過<sup>ご</sup>していた。  
彼が携帯していたナイトメア拠点の調査データが、何者かに奪われていたことを。

リサイクル研究所。

生涯を全うしたレプリロイドたちの墓場は、彼らのDNAデータを保管する役割も果たしていた。

かねてからデータをつけ狙う輩は後を絶たなかつたが、ナイトメアに占領された今、宝物庫は鉄壁の布陣を敷いていた。

異形の軍勢は物欲に駆られた賊を迎撃し続けてきたが、今宵の盗人はいつもにまして凶悪なようだ。

「ずいぶんと不気味な衛兵だな。だが門番にはもつてこいか」

人を模した蛸。たこ

ゼロがナイトメアに抱いた印象は『氣色悪い』の一言に尽きた。人型の上半身は黒一色に染まり、腰から下は剥き出しのケーブルが垂れ下がっている。顔の半分を占める巨大なモノアイは赤く発光し、侵入使者を排除すべく無数の光弾を放つ。

広範囲に及ぶ散弾にも臆することなく、ゼロはセイバーを抜き放ちナイトメアの軍勢に立ち向かう。

寄生による必殺を得意とするナイトメア相手に迂闊な接近は自殺行為だ。遠距離の攻撃手段に乏しく、必然的にセイバーを用いた中距離戦が主体となるゼロにとって、ナイトメアはまさに天敵と呼べる存在だ。

そんなハンデをもるともせず、赤い暴風は蠢異形を片っ端から圧殺し、屍の山を築きあげる。ナイトメアは瞬く間にその数を減らし、ゼロが施設の最奥に辿りついた頃には、生き残りは10にも満たなかつた。

「管轄はどこの？」へつぶしだ。スクラップの処理を怠りやがつて…

そこには金銀財宝など見当たらず、一面にガラクタの敷き詰められた空間が広がっていた。

その死骸の山こそ宝の正体なのだが、探究とは無縁のゼロは何ら価値を見いだせなかつた。

「シャシャシャシャ、この聖域まで辿りついたヤツは久しぶりだぜ。まさかナイトメアの加護を突破して来るとはな」

拍手と共にゼロの来訪を歓迎するレプリロイド。そのすぐ横の床にはアンカーが突き立ち鈍い輝きを放っている。

異臭と排煙の立ち込める工房は神秘性の片鱗も伺えず、ただ不快感が増す一方だった。

「ナイトメア……さつきの不気味な連中か。あんなものを受けたて、いつたい何のつもりだ？」

「あん？ 何も知らねえのか、あんた？」

世間を騒がすナイトメアの名に疑問符を浮かべるゼロを見かねて、レプリロイドは鮫牙さみがの生え揃った口を開く。

「コイツはな、この世界を理想郷たらしめる儀式だ！」

「儀式？ それに理想郷だと？」

「？ウイルスだか何だか知らねえが、どこもかしこも醜悪すぎんだよ。だからレプリロイド共を殺すのさ。奴らの血で世界を清め、より高次元の『エデン』と化すのよ！..」

「なるほど……それで、そのエデンとやらに貴様が君臨するのか

「おうよ、この俺はメタルシャーク・プレイヤー様だ。いずれ世界の神となる存在よ！」

「さなり荒唐無稽を語りだしたレプリロイドは、依然として瓦礫の山でふんぞり返っている。

その姿は正にお山の大将。神々しさなど欠片も感じられない。あえて形容するなら猿山のボス猿がいいところだ、どう見ても鮫だが。

「廃物管理所を占拠して神を氣取るとはおめでたい野郎だぜ。お前のプログラムもスクラップ化してんじゃないか？」

「あんたみてえな凡庸なレプリロイドにや理解できねえのよ。この俺の神聖なるプログラムはな」

「ああ、理解できないぜ……イレギュラーの狂った思考回路はな！」

そんなんゼロをつまらなそつに見下し、メタルシャークはアンカーを手にして軽く肩を叩く。

「あの野郎もよく分からんぜ。今わざとこんな死に損ないのデータを集めで何になるつてんだ。エックスとかいう野郎にや興味があつたのによ」

「安心しろ。貴様にくれてやるデータなど一ビットもない！」

掛け合には終わりとばかりにゼロはガラクタの山を駆ける。足場の不利をものともせず疾風の如くの勢いで斬撃を繰り出す。

圧倒的な威力を誇るセイバーの一撃を、敵は手にしたアンカーで弾き返す。高出力のエネルギーを受け止めてなお、その表面には傷一つ付かない。

「無駄だぜ、この俺の神器はオリハルコン製だ！ あんたのセイバーでも斬れねえよ」

武器の性能を自慢げに語りメタルシャークはアンカーを振り下ろす。遠心力の込められたスイングは掠るだけでも危険だが、ゼロは軽い動きでそのすべてをかわす。

傍目には、怒涛の連撃を前に、成す術なく防戦を強いられているよう見える。しかし、実際はゼロの方が圧倒的に優位を保つていた。

「ダメだな、まるで武器使いがなっちゃあいない。オリハルコンの名が泣くぜ」

あまりにも大振りなフルスイング。その拳動にはなんの技術も見受けられず、百戦錬磨のゼロから見ればお粗末すぎる攻撃だった。加えてメタルシャークは大雑把な動作で無駄に体力を消耗し、対するゼロは最小限の動きで凌いでいる。このまま戦闘が長引けば形成は逆転するだろう。

「くつ……少しばら出来るみてえだな。いいぜ、この俺の本当の力を見せてやるよ」

そんな攻防が5分ほど経過した所で、メタルシャークもようやく己の不利を自覚する。

我武者羅にアンカーを振り回すことで強引にゼロを後退させ、地面　山積みにされた廃棄物の海へと飛び込む。そのまま中を突き進み、メタルシャークは数秒と立たずに地中へ姿を消した。

逃亡とも取れる行動だが先のセリフからして相手の戦術である可能性が高い。ゼロは下からの強襲に気を配りつつ、壁を背にすることで背後の警戒も怠らない。

「チャンバラの次はガラクタの中でかくれんほか？　随分と泥臭い

神様もいらしたもんだな

「シャシャシャ、そう焦らねえでも見せてやるぜ……」

ガラクタの海が飛沫を上げ、2つの巨大な金属塊が飛び出していく。目を凝らすとそれは様々な部品の寄せ集めだった。

動力炉、E・カートリッジエネルギー、A.Iチップ、欠けたレーザーガン、壊れたサーベルの柄 レプリロイドの構成要素に、破損した武装品。先の不可解な行動は廃棄物の中から再利用可能なパーツを集めていたのだ。

次いで姿を露わしたメタルシャークは、そのままアンカーを大きく振り上げ廃棄物の集塊に叩きつける。

「さあ、刮目しな！ これが俺の 創造神の力だ！！」

本領を発揮した敵の振る舞いは戦闘時とは似つかない。

素人目にも一流と分かる練磨された動き。その一撃動が迅速さと精密さを兼ね備え、先の荒々しさは微塵も見られない。出鱈目に振るわれただけのアンカーも、本来の用途の元では目を見張る性能を発揮する。

ガラクタの塊は匠の手により研磨され人型へと姿を変えていく。着色こそ施されないものの、たちどころに生命を帯びて行く。数刻と経過しない内に、それらは完全に2体のレプリロイドと化していた。

「なつ  
」

メタルシャークが技巧を披露し終えるとゼロは言葉を失った。  
その手腕に心を奪われたのではない。  
その離れ業に魅せられたのではない。

ゼロを驚愕させたのは過程ではなく、それにより生み出された作品だった。

恰幅の良い体躯を誇り、サーベルを握るレブリロイド。そして華奢な体つきをした、拳銃を構えるプリロイド。

「カーネル……アイリス」

自らの手で命を奪つた好敵手が。  
自らの腕の中で息を引き取つた想い人が。  
失つたはずの友が眼光を潜めて佇んでいる。  
動搖を隠しきれないゼロの姿に満足したのかメタルシャークは哄笑を漏らす。

「今は亡きオトモダチとの対面はひとつよ。この俺の慈悲深さに泣いて感謝しな」

「……こんな偽物で俺を惑わせると思つてゐるのか」

一人を前にしてなお氣丈に振る舞うゼロだが、内心の動搖を隠せずにいた。

そんな彼の心中を察したように、メタルシャークは邪悪な笑みを浮かべる。

「ああ、思つてゐぜ。そいつらはデータを元に復元させた正真正銘の『本物』だからなー！」

その声を意図にアイリスが天井へと銃を放つ。

ゼロは不可解な行動に一瞬眉をひそめたが、その意図はすぐに汲み取ることができた。

メタルシャークの隣にいたカーネルが消えている。アイリスに気を盗られたわずかな間に死角へまわり込まれたのだ。

長年の戦闘で染みついた防衛本能が咄嗟にセイバーを振るわせる。半ば無意識のゼロの行動は、彼の背後から迫るサーベルを的確に防いでいた。

そのまま数度打ち合つだけでメタルシャークの妄言が現実味を帯びる。

間断なく襲つてくる敵の太刀筋は、ゼロが幾度も手合わせしたカーネルのそれと酷似していた。

「創造神たるこの俺が贋作に甘んじると思つてんのか？ DNAデータさえありや復元は楽勝よ。先の騒乱で半壊したレプリフォースに忍び込むのは容易かつたぜ。シャシャシャシャシャーーー！」

「まさか……二人のDNAデータを盗んだのか！？」

「おいおい、彼女を無視してこの俺に見惚れるか？ そんな甲斐性なしにや仕置が必要だな」

アイリスが再び発砲する。今度は上ではなく正面に向けて。

放たれたレーザーはゼロの肩アーマーを吹き飛ばし、その隙にカーネルがサーベルの柄で側頭部を殴る。

「シャシャシャ、ビビり兄貴もお怒りのようだぜー。妹をたぶらかすナンパ野郎によー！」

そのままサーベルが突き出されるが、ゼロは屈むと同時に足払いを放つ。さらに、よろめいたカーネルにタックルをかまし、アイリスの銃撃を避けつつ間合いを取る。

カーネルは特にダメージを負った様子も無く体勢を立て直すが、そのまま後方に跳躍してメタルシャークの傍らへ戻る。

指示を飛ばした張本人、メタルシャークは腹立たしい表情で舌打ちする。

「ちつ、一人掛りで手こずるとは、役立たずなガラクタだぜ。出来そこないにこの俺の下僕は務まらねえ」

そのまま苛立ちをぶつけるように、カーネルへとアンカーを振り下ろす。

オリハルコンの一撃に残骸の寄せ集めが耐えられるはずも無く、その頭部はひしゃげて破碎する。

「あ

すぐ横に立ちすくんでいたアイリスも蹴とばし、倒れた彼女の後頭部を容赦なく踏み潰す。

メタルシャークは自ら生み出した一人を、自らの手であつさりと破壊したのだ。ゼロに見せつけるように、彼の反応を楽しむために。

「貴様

「……なんてな

しかし、頭を失ったカーネルの体は崩れ落ちずに直立している。首から上を消失したアイリスも難なく立ち上がり銃を拾い直す。そして地面のガラクタが吸い寄せられるようにして一人の首へ付着し、即座に融合することで頭部を再生させる。

残骸の集合体は耐久性こそ並み以下だが、その構造ゆえに多少の欠落は容易に補える。このガラクタの海で戦い続ける限り半永久的な修復が可能なのだ。

「言つただろ、作り直すのなんざ朝飯前だ。木偶の命はこの俺の手中にあるのよ」

メタルシャークはDNAデータの解析において卓越した能力を誇り、データを基に死んだレプリロイドを復元できる。

彼にとってレプリロイドの命は路傍の石に等しく、退屈しきのぎの遊具であり、都合の良い道具に過ぎないのだ。

「こいつだけじゃねえ、全てのレプリロイドは俺の玩具おもちゃ！ カス共の命はこの俺に弄ばれるためにある……」

命を操れるメタルシャークは命の重みを理解できなかつた。創造の力を手にしたゆえに破壊することを躊躇わなかつた。

「作るも壊すもこの俺次第！ 創造と破壊は表裏一体！ この俺が創り出し、この俺が破壊する！ 分かるか、有象無象のレプリロイド共の命はこの俺が握つてるんだよ……」

暇を見つければデータを搔き集め、復元の技術を磨き続けていた。興味本位で軽はずみな復元を行い、面白半分に破壊を繰り返した。

「もう少しで、あと一歩でこの力は完成する。その時こそ、この俺

はあらゆる命を支配して神になる!」

『蘇生』ではなく『復元』。

『復活』ではなく『修復』。

その力はゲイトにこそ遠く及ばないが、メタルシャークは確信していた。

「世界を手にするのはシグマでもあの野郎でもねえ、このメタルシャーク・プレイヤー様だ!! シャーツシャシャシャシャシャシャ!!」

レプリロイドの心を犯し、穢し、辱める。

レプリロイドの命を玩弄し、蹂躪し、餌食とする。

レプリロイドの魂を踏みにじり、食り食い、慰み物にする。

神の如き力を誇るレプリロイドは、悪魔の心も兼ね備えた真正のイレギュラーだった。

「そのためには、まだDNAデータが必要だ!! でもあんたのデータはもういらねえ。ここで彼女と一緒におねんねしなあ!!」

カーネルの援護に徹していたアイリスが銃を手放し飛び掛かる。捨て身の体当たりに威力は皆無だったが、彼女はそのままゼロを抱き締めるようにして拘束する。

レプリロイドの遺骸で形成された体にかつてのぬくもりは感じられない。久方ぶりの抱擁はどこまでも冷めたものだった。

そしてカーネルがその背後から迫り、サーベルを大きく振り上げる。恐らくは、アイリスごと自分を斬るつもりだ。

畜生にも劣る卑怯な手段。決闘の礼儀も、軍人の誇りも、義を重んじる姿勢も、妹を想う心もなくしてしまったのだろう。

二人を貶めた張本人は愉悦に浸り高笑いを上げている。

甲高い耳障りな声が響き渡り、同時にサーベルの一閃が放たれる。

「ウシャシャシャシャシャ……ア？」

轟音がメタルシャークを早過ぎる勝利の余韻から引き戻す。

密着状態からのバスターはアイリスの体に大穴を穿ち、カーネルの片腕を吹き飛ばしていた。彼が束縛から逃れたわずかな隙にも、残骸はアイリスの風穴を塞ぎカーネルの左腕を再生させる。

メタルシャークが実証したようにわずかなダメージでは一人は倒れない。葬り去るには自己治癒能力が追いつかないほど破壊し尽くす他はない。

「……アア！？」

セイバーで首を斬り離す。

セイバーで腕を斬り飛ばす。

セイバーで足を斬り落とす。

セイバーで胴体を斬り捨てる。

原形を留めないように。  
確実に始末するように。

今度こそ 安らかに眠らせるために。

二体のレプリロイドは切り刻まれ、分散して元の残骸へ回帰する。集約させられたレプリロイドの遺骸が、ガラクタの海へ沈んでいく。

魂がメタルシャークの呪縛から解放され、あるべき場所へ帰つていぐ。

「バ、バ力な！？ なぜ斬れる、なぜ殺れる！？」

敵は反撃できないと思い込んでいたゆえに、メタルシャークは度肝を抜かれる。

彼は前もってゲイトから連絡を受けていた。レプリフォースの力一ネルとアイリス兄妹を復元すれば、確実にゼロを仕留められると。神の力の前ではゼロなど恐れるに足らぬ存在だと。

主の言葉を鵜呑みにしたメタルシャークに保険など用意されるはずもない。やぶれかぶれにアンカーを振り回して突撃するが、素人の攻撃は剣鬼の片手に受け止められる。

「あ、あの野郎……話が違うじゃねえか！？ そいつらはあなたの

」

「ああ、俺がこの手で殺めた仲間だ」

一度として忘れたことは無かつた。

この手でカーネルを斬り伏せた感触を。

この手で抱きしめたアイリスのぬくもりを。

「でも、俺は

」

虚構の安寧に浸るつもりはない。  
架空の平穏に惑わされはしない。  
偽りの幻影に左右されはしない。

「誓つた」

カーネルの生き様を。  
アイリスの死に顔を。  
彼らの魂を背負つと。

「それを貴様は

」

一人のデータを盗み愚弄した。  
二人の魂を隸属させ利用した。  
見逃せはない。

許せるはずがない。

アンカーを握る手が怒りで震える。

強大な握力がオリハルコンを軋ませる。

「んなあつ！？」

メタルシャークに戦慄が走る。  
セイバーすら無傷で受け止めた神器が。  
幾重にも強化加工を施された超合金が。  
最強の硬度を誇るはずのオリハルコンが。  
アンカーがゼロの手の中で悲鳴を上げ無数の亀裂が走る。

「あいつらのDNAデータを　　魂を弄ぶことは許さん……」

怒号と共にオリハルコン製のアンカーが粉々に砕け散る。  
愛用武器なくして復元は実現しない。  
神がかつた技能も道具が無ければ実行できない。  
この瞬間に、メタルシャークは神を自称する資格をなくした。『創造神』の称号を剥奪されたのだ。

「お、俺の神器が……神の力があああああ！？」

あと一步で頂点に君臨できたのに。

あと少しで神の域に到達できたのに。

癪癩を起こしてヒステリーに陥るメタルシャークだが、的外れな怒りは数秒も続かなかつた。むしろ怒り狂うことで平静を保てていた。

興奮で正気を失っている間は恐怖を感じずに済んだから

「クレイジーだ！ イカれてやがる！ あ、あんた悪魔だ……ぜ……」

…

気付けば無意識のうちに一歩下がっていた。

全身に戦慄が走る。

全身が恐怖に震える。

総毛立つような悪寒に襲われ、気が狂いそうになる。

後ずしゃりとした足がもつれ、無様に尻もちをつく。

「ま、待てっ！ この俺を誰だと心得てやがる、いずれ神になる存在だぞ！ この俺の命にどれほどの価値があると思ってんだ！？」

度し難く愚かしい命乞いのセリフ。

それは火に油を注ぐ役割しか果たさなかつた。

「どうか、なら身をもつて知るがいい。貴様が弄んだレプリロイドたちの怒りを 命の尊さをな！！」

「ヒイツ！！」

神の威厳はどうやら。メタルシャークは恥も外聞もかなぐり捨て逃亡を測る。

先端の欠けたアンカー 神の力の名残も手放し、地中に逃げ込もうと飛び上がる。

しかし、二度目を見逃すゼロではない。冷静にバスターを構えメタルシャークの着地点を先読みして狙い撃つ。

「ぐあああつ！？」

ゼロのバスターはエックスのそれと比べれば性能が劣る。メタル・シーケは直撃を受けてなお意識を保っていたが逃走経路を失つた。

「死ね

眼前に迫るセイバー。

眼前に迫る死の恐怖

辯けられぬハ魚村の筆也。

ヒ...イギヤアアアアアアアアアアアア

数多の命を弄んだメタルシャークは、最後に命を弄ばれる恐怖を体感した。

力に溺れ神を称した愚か者は、自身の命を代償にして命の尊さを学習した。

メタルシャークは恐怖に顔を歪めたまま、その首を跳ね飛ばされた。ゼロの背後から飛來した赤いブレードによつて。

「なんだ!?」

ゼロが背後を振り返るタイミングを見計らったように、何者かが彼の真横を高速で駆け抜けた。

颯爽と現れた人影は首なしのメタルシャークを肩に担ぎガラクタの山へ飛び移る。

「いやはや、ボウヤのが涙と感動の友情モノなり、キミの物語は愛憎ひしめくサスペンスドラマだね。まあ、これはこれで楽しめたけど」

濃紺のボディと赤いバイザー。

つかみどりのない、傭兵らしからぬ外見の男。

その顔には相変わらず軽薄な笑みが張り付いている。

「お前　　ダイナモか！？　まだ生き延びてやがったとは、本当にしぶとい奴だな」

「そういうアンタも大概だね。神風宣しくコーラシアに特攻なんて自殺願望でもあつたのかい？　死ぬどりか何かに田覓めちゃつたみたいだけだ」

せせら笑う相手の様子にゼロは歯噛みする。

敵の言葉に耳を傾けてはいけない。口ハ丁で、ダイナモのベースに乗せられるだけだ。

自身に言い聞かせることで怒りを抑え臨戦態勢を整える。

剣呑な田つきでセイバーを向けるゼロに、ダイナモは失望を露わにため息を吐く。

「ん~、よろしくない反応だね。ボウヤはもうひとつ再会を喜んでくれたけど」

「お前のノリになつきてあつてられん。早くこつものよつて逃げ出せ  
ばどりだ、田障りだから消えてくれ」

嫌悪を声に乗せて吐き捨てたのが失敗だった。

始終無言を貫いたまま追い払うべきだったのだ。

それを待つていたとばかりに、ダイナモは底意地の悪い笑みを浮かべる。

「おお、こわいこわい。そんなに獲物を盗られでじ立腹かい?.

「なに……」

「気付いてる? アンタさつきからボクを殺したくて仕方ないって顔してゐや」

聞き流せない挑発のセリフ。

呪詛めいた言葉が心を抉る。

魔性の囁きが傷を切開する。

「我慢は体に良くないよ、ボクたちレプリロイドにもストレスはあるんだからね。生きたいように生きて、殺<sup>や</sup>りたいように殺せばいい。シグマの田那の荒治療で正気に戻れたんじゃなかつたの?」

気の向くままに殺す。

本能の赴くままに殺す。

欲望の求めるままに殺す。

感情に促されるままに殺す。

食事や呼吸と同感覚でレプリロイドを殺す。

ただの氣まぐれでレプリロイドの命を奪う。

田の前の男は決して放任出来ない、メタルシャークに輪をかけた

『悪』だ。

「でも、キミたちの自己犠牲は病的だからね。コーラシアの件とい  
い被虐癖もあるのかな。それとも　さつきのは贖罪のつもり  
だつたのかな？　だとすれば……クク、アンタも救われないねえ」

「　貴様ア！！」

やり過ごせない感情に後押しされ、ゼロは敵を斬殺するべく突進  
する。

鬼気迫る形相を曰にしてダイナモは満足げにうなずき、手慣れた  
動作で右手を地面に打ち付ける。バスターから叩き込まれたエネルギー  
は地下で圧縮増幅され間欠泉の如く噴き上がる。

いきなり乱立した無数のエネルギー柱に阻害され、ゼロはダイナ  
モを処刑する好機を逃す。

これぞダイナモの誇る奥義、アースゲイザー。広範囲に及ぶため  
威力は拡散されるが、牽制及び妨害においては絶大な効果を見せる。

「また会いに来てあげるから、それまでいい子で待つてね」

「待てっ！　ダイナモ！！」

ゼロの呼びかけも空しくダイナモは転移でメタルシャーク」と姿  
を消す。

空間転移は限られた距離しか動けないがダイナモの逃げ足は異常  
だ。一度でも逃亡を許せば捕まえることは不可能に近い。今頃はと  
つぶに工場の外だろ？。

「へそつ……」

やり場のない憤りを拳と共に壁へ叩きつける。

二人が偽物であることは分かりきっていた。

倒そうと思えばいつでも倒せたはずだった。

それなのに躊躇した。

一人を再び自らの手に駆けることを。

一人をセイバーの餌食にすることを。

信念ゆえに彼らの命を犠牲にした男が今さら何を躊躇うといふのか。

彼らに一方的に躊躇なふられたことは罪滅ぼしのつもりだったのだろうか。

だとすれば……クク、アンタも救われないねえ

救いを求める資格はない。

許しを乞える道理はない。

あんなことで償える筈がない。

あんなことで贖える訳がない。

どれだけアーマーに傷を刻みこもうと、心に刻まれた傷が癒えることはない。

この身が地獄の業火で灰になろうと、犯した罪は永劫に消え去ることはない。

「迷いはしないと、誓ったはずだ

」

俯いたゼロの瞳に光が燈る。  
とも

否、その瞳が輝きを捉える。

「……あれは！？」

奇跡か、はたまた運命か。

それを発見できたのは、砂漠から芥子粒を探し出すにも等しい偶然だった。

大量の残骸に埋もれ、おぼろげに光る一枚のデータチップ。それはメタルシャークが盗み出し、復元の核に利用したカーネルとアリスのDNAデータだった。

「そこに、いるのか」

震える足で近づき、そつと拾い上げる。

無機質なはずの機械片は光を、命の灯火を宿していた。握りしめた手の中には、確かにぬくもりが感じられる。失ったはずの絆。えにし失ったはずの縁。唯一無二の宝物。

掛け替えのない至宝。

それが今、自分の手の中に形として存在している。

「カーネル……アイリス……」

みどり翠のセイバーが紫に。

紅蓮のアーマーが漆黒に。

二人の魂をその身に受け入れ、ゼロは新たな力を手に入れる。

「……すまない。俺はまだ、お前たちの所に行くことはできない」

一度は彼らの元へ赴いた身でありながら、図々しくも現世に舞い戻つて来たのだ。

正確には強引に呼び戻されたのだが、彼らへの裏切りであることに変わりはない。

だからこそ、もう無駄にはしない。

だからこそ、もつ惑わされはしない。

紫のセイバーを握り、次の戦場へと向かう。  
黒いアーマーを翻し、己の信ずる道を進む。

「だから、もう少しだけ待っていてくれ

今度こそ、最後まで信念を貫き通すために。

O 「……いい最終回だった」

X 「なに復活して早々パワーアップしてるんですか！ なんかもう最初からクライマックス的なノリじゃないですか！！」

O 「知ってるか、ハンター・ランク4でゼロナイトメアを倒すとその時点で黒ゼロが解禁されるんだ。これでも一応原作の流れに沿ってるんだぞ」

X 「PS版じゃ出来ませんけどね……まあ、今回は相手が相手なんで大目に見ますけど。僕のアーマーほどチートじゃありませんし」

O 「ああ、本当に気分の悪い奴だった。といつわけでエックス、交代だ。俺はもう疲れた」

X 「まだたったの一体じゃないですか！ 僕なんか既に5体の上に瀕死状態ですよ！」

O 「スカラビッチはハイマックス、タートロイドはゼロナイトメア、シェルダンはダイナモ。お前の活躍なんて俺vsハイマックス戦に比べれば微々たるものぞ」

X 「うるさいですよ！ いつもはボテチ片手にモンハンばかり（以下略）

O 「な、なんだと…？ お前だってX-FDこそなつニート宣言を（以下略）

ここまでお読みいただきありがとうございました。作者の「わばらです。

今回は一気に2話更新しましたが、これで書き溜めておいた分がなくなってしまったのと、作者のリアルの事情により、今後は更新速度が低下しそうです。

今回のお話で全体の3分の2が終了しました。次の更新がいつになるか分かりませんが、なんとか完結できるように頑張りたいと思います。

あと、どうやら感想に制限（ユーザー限定）をつけてたようなので解除しておきました。創作の励みになりますので、お時間等ございましたら、一言だけでも感想をいただけましたら幸いです。それでは、しばらく時間が空きそうですが、なるべく早く次話を届けられますよう頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5923z/>

ロックマンX6（本編再構成）

2012年1月8日19時52分発行